筴[illegible]蓍說

ヲ 9
3799
3

安心得之事　五ッ飾
并　茶入持参之事

一　茶筅飾之事ハ袖入何共之飾之の事也　例之て茶入ハ飾ヲ座し

後入唱茶碗茶筅飾なれとも中入硯屏の内飾付物之外爰さしの

ことに云ひ而よふ事有之ふ

一　袖入茶碗飾之事ハ袖入ニ飾ニ付て前先ニ違ひして引出

門 ヲ9
號 3799
巻 3

昭和十六年一月十一日
尼野貴英氏寄贈

中合ニ置合せ可申候 出茶碗を飾ル時は

建水出し候而出座之事之置合茶杓を飾候節

茶入茶巾拭ひ可申事 又茶碗に置合し

茶杓を拭ひ又其上にあハせ候て置合 茶杓を

不至す候事

一 茶杓飾る茶碗之上に拭ひ可申候 外に茶入をも置

して見る候

又箸にハ出茶杓飾り出候も見合せ見合候而出茶之節居候

茶杓茶碗等より後引 拭見て可申候 茶杓茶碗飾り目録之

一 外箪笥飾る時は茶入を置合 茶入の置

諸方も拭ひ候事 出茶碗拭き置出置候 何年迄の後に出

候ける事 又拭ひ 出し候て拭杓を拭事見合

出し候て茶入を拭き掛之 又茶入の上に 拭

引き合せ候事 しかし置中之の置ハ可へし 一不

生け花をかけ可申候之

一 花筆之ふた出座におろし候て茶入申候よし 床の

おへ手前ひろく手をつき亭主へ一礼して
作法なとへくはしく心中有へし
一 むかしは無なく表をあらし子飾らし亭主披露とは不申
主上家の前に出しむかしふの事迄心得て手前亭主
下段より器も神の事示し見る事なし扇は心次第
おきて亭主済之後亭主ゆるしてかへりて炉の中をよけて
おくへし
一 当日花を持参候處を出して鋏にて花を切る

茶入は紹鴎は茶入をもって出す是は花入に
出候先様花を入候て又は床に置亭主取合せ中は所望ならぬ時
亭主の事に仕候といふて次の人は渡すへし 自分挽
持もよし
一 当日茶を緒より中段に移して濃茶をよく挽中次又は
茶桶に入て大津袋をかけ持出しては茶会の日は抹茶
を出先様へ茶入の口を切中は心を入もあしく挽中
持参仕るはつのひとつはいくつか万茶と申次此人へ相渡す

ちさき薬入ニ入持参いたし候ハゝよく候

一 此薬ハある老人方ニ相伝いたし候持参仕候ても中々無し見け候して兼薬持参仕もありよく撰て大津ニ

代り又ハ婦人さまヘて包ニ中ゟてもよろし

薬湯面白き的之事

一 薬の酒ニ気中ゟ日ハ朝より上下衣服ホかし置て中ゟ

懐中用意

鼻紙　薬巾　婦人さ

一 数寄屋草履 但し笄子入ニ而下と一所ニ包ニ持ス

一 炉の時分ハ白足袋をはく可し

一 風呂の時分素足ニ而あり

一 さけさや筒をさけ申間敷事

但し京都辺のかしこまりて中座の間ニ茶事書なと入候置し

一 亭主のもと菓子方ニ而いろ/\き々有りて遅滞無之様事内の剣頭ニ参り申間敷

一万一刻限ニ遅参致候ハヽ何成共申偽候而相済候様致
刻限ニ遅参候ハヽ急度申達候ニ付何成共ニても偽申立候而ハ不相成
さつしてよし真直ニ申出候様可致候
但し御次ニ而遅参ニ相成候ハヽ庭の格子より直ニ申出へし
中ノ口ゟ出入之時ハ其段申入候而可有之候
又廣間ニ而御次之諸手合とも申合候而諸手之案内
いたし候而直ニ通候ハヽ刻限之儀も相心得へく
待合可申候

一刻限相成候ハヽ諸手之案内いたし何事も申立候而座敷へ出
かくらへと是非中立候上ニ而座敷へ入可申候
一御次口ニ草履ぬき候ハヽ其者入て待合可申候又草履
ぬき候ハヽ持参の草履を出し途中ニ而草履を履候者待
合之事
但し途中ニ而草履ハ御次入口左の方ニ脱て置可申候又
直ニ出候ハヽ其草履をはき候而自分之草履を置へし
一毎度ゟ是非御次ニ而待居候ハヽ其者待合可申候

右の通りにて指添へつかまつりへのせ話次第通るべし　自分の下駄傘ハ
亭主の都合により脱ぎ置くべし
一　當合にて上下着用衣服改め申すべく候
　併し急ぎの時ハ袴合掛りにてもよし
　併し講家ハ平日上下着用衣服改めまじくともよし
下むらひ當隠居にて与役なる調へ申すべき事
家来召使ひの者ハ此方へ仕せ置き申すべく候
合家の者控へ居り来客より呼び出し次第お指図の節案内致し申すべき事

叮嚀にするべし
　併し客人へお取次いたし一万端に致すべし
　此方にてハお次の間にて下座へ控へて居るべし
此の者水にて客ハ此家来へ其の世話申し候へ万端此方の家来に
　其の世話申さぬ様にて致す事
一　亭主中くゞりあけ迎ひに出る上客の次へ随ひお礼此方にて
挨拶ハ入不申候黙礼にてよろしく亭主中くゞりより中門を通り候
先座又堂合子付くべし此方にてハ初めてたゝみへ申候てもよろしく

一　堂待合なくして事侍りける数寄屋ハ亭主待合に出迎ひけれハ
客の方にも客座其外の数寄へ参し　たとへ亭の也をさむるへき客座ホ[illegible]
待合へ出て客座其外く数寄し亭主と二客との間に[illegible]をさむる事も有
亭し待合より出て帰る事さて大り上客の座の上に移て[illegible]
なり客待合相揃ひて上客より客の数寄と大きに亭主事しさて
しらぬ相人待合へ入

一　座敷の通しく亭主むかひに出かけ出て客を被
て中に[illegible]

此所にてハ亭主むかひに出たる時ハたゞ亭主又大数寄屋にて御目見ひ
無用　又主としく御挨拶と遠慮ふ

一　亭主むかひに出て上客に挨拶して数寄屋へ亭主のきたる
をみて待合に出まで各々二三歩くのきて上客へ礼して客座を
待合の後へもよせかけて立置隠しおき猶数寄屋や入二客同大方
上客数寄屋へ入らひそへ合上客立かけてる客座に腰掛の前
くゝる客座をかさねて次く挨拶をして上客の通りして数寄屋へ入
又次も同断末客の客座をかさね元の所へ[illegible]にたてこ

ゐん土地の通りにして数寄屋へ入

但し上客ハ列客と共に路次の内数寄屋石燈籠前ニ待

自分ハ切戸より茶道口の戸をあけおき候て座候

候事

一 路次へ会ニハ上客ハ腰掛へ出合少し路次の露地を出へし

而して上客ハ次客末座と挨拶ニ及候それより座敷の縁ニ立寄

亭主の心得ハ中潜り入口と挨拶申候事

但し中くゞり中門まで路次の戸を閉め申ス

一 亭主ハ客一同礼して上客の挨拶ありて床へ

二客の次ニ席ニ入順々ニ客座ニ上り上客掛

物を改め床の掃除柄の飾物座敷の掃除寄附庫など

一覧済之

一 膳出ハ客ニ済て中盃ニ取候事ニ而上客へ

次ニ礼を述候 但し膳引ハ客ニ上客末客之

用ハ亭主備手口より中合迄出座候事

但し汁ハ客ニ替へ切ル事

一亭主か上客へむけおし出し汁ハ給といふて上客か次へ
廻し通し末座まて惣物備の方へよせ置申事
一神の酒ハ其方へとあいさつをして亭主へつかせ申也
くはしくハ右膳ニ子細有之事
一汁三椀飯も三椀ニおよひ候ハゝ亭主も亭主の方へ成り申合
ゆるしく候へハ亭主と挨拶を通し飯汁飯汁なと認めても
よろしく
一亭主ハ着替挨拶と豊請らく判当前ニ持出といふ也 是非〃

やさしく上客か盃をさし給ひて亭主のきさはしを
いたゝき申候事 相客ハ酒のくあへむ汁ニて出し申事
候事也上客の挨拶尤一の上ハ酒肴ハならぬ事あいさつ被成候
ならく様子も相手ちけて子細純子を合せ申候事
一吸物上客ハ手前挨拶致か減のあし加減ぬ内吸ひ申候事
一酒出し候て上客か次を見合一礼箸をとり申候事
一無へ仕舞候て椀を取り持出と洗わけよこれ候て器拭きぬ
て申候ても無へハ給をとり候 よこれ申ハ家の先れハ洗わけよこれ

ふやしふぬくひやうてハあしく又なしなとまて椀の始ちよ
うれぬ椀子なべ下やうてお家のしておきふ懐紙を引て膳
椀なとぬくハしハ卵なおしき事なくなとのあしきとふ
為し陸なよまれぬ椀并〓子なべ下やし事若なとも
むかしハ為なよごし食べなる又手よごして食べたるなど
家の自膳子いかし重るよし左らハ紙まてぬくふても
ふ及亭主家始り見せる事も又息ある為し面附紙まて
始末やんとの椀ふんほうる者あらハ先ふんほ本式をとふ存候

食べよごし食事を始むしかれ家へ對し恥なる事なり

一 膳をかさねて椀かさねて出す人あれあしく并袖きん〓とハ
猪をまつて待たる亭主若や時渡し気をよくしとやうに
きん〓なとへかさねて出す法句あるなしとやうなる

一 菓子ニ付て楊枝ハ一本ハ懐中いかし預り置し是ハきらひなれとも
仍て二本楊枝なるむ杖とふろかしと打交て枝ハきふ子あしき
この事ハ左らくふろあしの方を懐中致へし楊ニ本
仍し其きる事なるを二ツニ折て本の方をのこしさきを懐中

も通りし客も早くて懐中なるべくさといふ事之

一 中立時分後来席入り口の戸まで上客よりおくれなく末客

二客も席をあけ上客分致し上客分志て末客と挨拶いたし

中立の時宜を得べし名物の掛物とて床へ行掛ものをとる

べし其は中立はたづね中ん事之

一 中立後ちけ候合とおもひて来座より初の通り席入致し候

時は亭主揃へ候て其中にて候は亭主案内

あるべし上に数寄致し合事之

一 亭主案内あらば中合さうそく数寄屋に入通し床花を

見て炉辺にさし菓子をも器の上のあらもん合付見ルへし茶に急之

亭主切なく茶器のありまゝを拝見し亭主不用ゆるりと致し

中にもちを亭主おもてといふて茶よし出之と中座し其時無之

一 茶立おわりて列客越礼亭主へ礼ありてもよろし上客茶碗

取次礼をしてのむ上客二口のみと無くして二客へ次礼をなし二客も

同様上客二客へ茶を渡し二客以下なるは上客段々一礼する

二客目も同様末客へ茶椀取り置べき事ゆへ末上客へ戻し

上客飲くちを拭ひ置候て縁の右の方に置茶碗見て返し末座

に戻りたる上客此を見て亭主へ戻す但し飲くちとも亭主へ戻す 注云

亭主より客各挨拶礼ありて花生の縁を拭ふ水さしを拭ふ出帛

しまふと也時刻移さぬ事に挨拶水さしの蓋をしめて上客か

茶入袋茶杓を所望又亭主出して上客より拝見其後

出帛し引廻し亭主我前に置亭主も客も挨拶礼ありて後上

客より様子にと云ふ亭主引廻し袋を取て上客二客へ

挨拶して茶入より見て返す二客三客同じ末客より上客へ

かへす席中より右手茶入左手杓袋を持てあゆみ切上座の

前に置もよし又せまく候てよき所に置事もあり

上客へ渡しもよし是も茶入袋杓並べて置之上客より始

めて亭主の挨拶ある亭主座へ戻る亭主勝手へ帰る亭主又帛紗に

重茶碗水指茶杓茶入台に載せて所望亭主持て引に

入て道具を皆持出し菓子器は持出して置候あとにて置

列客上客より順々に亭主より上客は亭主も先休息して茶

菓子をあけてかへし菓子のひも茶をたて一二服く茶巾にて

亭主より持出て此所にて釜をあげ中立之釜初炉の仕舞
とこある其の座へ帰りかけ又出て仕舞て飾りてもよし出なば萬葉に忘れ
候て萬葉客ハ下座し又中立より懐より仕舞て下座に通し
萬葉ハ二畳の炉など一畳の茶も一畳の炉の座通し仕舞より
此所にて炭斗を出し客見て出し亭主炭を見て仕舞
あさし座敷それより障子なく何事も不定して見中度らく
此所にて出びん中に事之見粗陸に竹窓手拭一見中に
仕舞より座し中是程亭主出し是も不座にかよし茶の

炉ニ炭ハ加て炭すがよし亦さしなと大きなる物をも見中に
置は椽子掃せて見届に事
一 座りの客は上座の脇に挨拶をなすべし此時あいさつ川はや
ゆるし仕舞おもて大事なとあつくいふ詞亭主迎へ上座の
花を見なとの釜とて釜も見て後に中は茶碗座もことは
んと荷をして志めなよし迎ふる主客出らて挨拶立て
勝手亭主客なども見もなし客人などないかかるにはそり
此客用といふ事にし忘れとも都ては障子立待挨拶まて

おさぬ様にも無しくゞり口あけらく真体といふべしされども
又おりらく一礼して亭主のれけ時様之伝次也等磨兼之といふ又
客躰の風呂の時は口切時は也等磨兼我らじの庭く茶葉ふなとも
くしにも留主し亭の心得迄まであいさつもなし　堂待合にて
上下をも衣装なとかへて帰り申ことなり
一　席中にて出るもの也しいらしや香也は但　病気のもちなしふ
者の御し無用只種ある也と待は事し心得第一なり
一　客人にお宿ふさがしく私宿中でなくるあいしく小輪に宿

見る無し
一　膳部の客人にも席をなめの事は亭主之心得第一なり
迎り花之事
一　茶の湯当日に迎て花以来て置なとせしもらく上客の留など
接待して床の前をあけて申は初の花は是非に上客の役なれハ
おしあいさつありて生の申は事　但し其の花上客にて外客の
内留れまても生申らく花生を備ゐくよせ帰り申はがよし
落葉も仕舞く記之文流茶呼たてぬ茶客人と花生花臺飾付之候

亭主勝手口より出花出させ連客の内に出より花にて茶一ぷくと
いふて相客一礼して一服の茶をやくべき事

亭主へ茶を相伴させる事

一 亭主茶を点て茶出し候へ今出来相伴に仕とて茶入の茶払ひ
切かへて茶を点て出し其時上客先へ亭主様も上り下
出され候へしと挨拶して上客茶碗を上ケル之
一 末客茶を飲みて亭主方へさらへといふ上客へ出し候茶
の通亭主へきらせられませといふ末客出しを上ませふ

出て末客亭主の前へかへり客茶碗を渡ス末客一礼
をする事
一 上客出茶碗を渡し出し拝見いたし客皆一ト通り亭主前へ返し
例の通見て其之亭主洗ひて床へ返しとせし也候とふて
候ハ、出せるがよし尚見させて一人ましされとも亭主次第
茶杓洗ひ出させを通すいふ三方の客へ候者
させるがよし

諸見物の事

一 諸兄に茶と誓ひて我家一番人後誘ひ言ける茶の湯ある事に

のもよひあらハ待合に亭主出事 客ハ坐を見繕ひて為其之一二

如く為へ東子と客衆に行儀を守りて案内を乞ふべし 掛物の志

御茶の湯御座に出御床前に参り掛物を見て中合誘に出中に

御諸されも亭家に在る御紹猶見に御付にといふ亭主挨拶ニ遣ひて

中座中に行く先挨拶を子て待居し亭主挨拶をあけ御通り

にかへといふなり 亭射客分は是に御つされもいと主持あまり合ふ法

茶の湯御用出客方より御床前外ニ付中合に出中に出て客連れ通りに

格子御付子方ニ之中に心しニ亭時亭主分あれさへ次第に相應に

様狀に被ニ之客もよくき事つ之是ハ此方分をとめて茶の事な

れハ亭主のたうたきハ亭主の次第に六寸ニまての也かなたまハ

ちさき事つ之

一 亭主迎ひに待合に見え為其之三如く為べ掃除其手多く

見に留て手洗ひ数寄屋へ入事常の如くし座に見えを出く

亭主出て挨拶して今 此御客なとと有て御望み座敷

如く御格子の事 其前に候ととれんといふ

一亭主炭斗出し香合拝見常の通

一菓子持出し常の通なれ共此時亭主濃茶挽出候へハ

客始め其の仕舞いたし上客より所望いたし候て後亭主にいふ

亭主とめ候へは時宜に生の寸過し候て水指かざりよし

一床に花生かけ置きのとりけて座敷改め濃茶点てはこび

点いたし此時も仕舞候と後茶入袋茶碗を出し茶杓を添て

薄茶を所望いたし候へよし

一かけ物なし花生斗置て水さし茶入仕合常の通の事

の湯通に濃茶点てかへ茶師付に候と見れ過し此時は前に炭

出し常之様に炭いたし時香合を所望致し

一かけ物なし花斗置て炭出し濃茶をとひ点いたし候

をまわし候にふ客床前桁掛けかけ物なし時いまたかけかけ物

見仕度何事なかけからへといふ時亭主花生持出花

をとりて花生を引 追掛置の持出掛置の掛之

一上客より吹礼して亭主床の前まで掛置物をみせ

座に見え上客より何事も花出し候得は仕舞といふに亭主花生に

のせ掛りかけにて客の前に出ス時臺共いつくしき花を
にじり口の障子並にじり口をあけ置しきりに花をさけ
待合へ引之

附リ　薄茶客人給之事

濃茶点前ニ而客一巡仕舞上客ゟ茶碗座ニ直リ主茶碗
を取リ並附上客ゟ次第ニ沸してよりつき申候薄茶仕候
にごれりといふ是ハ客の内ハ我ぐ会うら取を又給ミ子気
て立つゞけてすゝむきくにてそれ々にさらりて立真々也

仕方の人ゟ先ニ我主客ニ様子ある時ニ不足いつふ事之
客未方へ伺ふことも不足スル之茶碗座へ出子申薄茶
にごりといへどもふりわるとて茶碗をすゝぎ下子並附上
客茶入袋を先主出シ上客請取次の客へ拝見ども饗之
座といふて床の上ニ並床無之時ハ向板次横ニ並之
主へ主分濃茶並菓子出して上客請取並薄茶
点て出ス時ハ一服宛香ニ而ゟ二服く右中客ゟ薄
茶仕舞ゟ仕茶抹拵えを不望スル薄茶点て出

上客待ち客ニ亭主一礼せしを引出て初而席ニ入

残りと一所ニ上客分見て相伴客之上客同様亭主の通之

其外かはる事なし客分茶入袋并茶杓蓋置等なるべし

席之

飯後ニ客ニ気付ル事

一 飯後は昼飯後あり家内まてとくと咄子於痛て不之

候へ刻限ハ九ツ半時分ニ行あり菓子都して振舞之

お湯なとあし中までそくと茶済き中立いたし之只飯の

なき茶の湯と存べし何もかはる事なし

一 菓子まて一通り済て仕度而飯後出し候へて茶内まて

又夜分ハ時分至る客附之腹中もおし其の先を食べてもよき

格ニ覚悟しても宜し中立いたしかよしむかしハ宜く

其の座ニ候何も角も相調候合まて休足いたし数寄屋へ

入る事也と至る如内ニ居る之様ニも九ツ過ぬ格ニ居れ之

一 臨時ニもかけ置之儀ハ孫客共茶濃茶の挨拶迄にて

先て菓子なかり挨拶致しき事ありと存付其外ニ立候へし

あかさ川をして手前に立事之ゑ附寮主を待居申候桁
申候へ共待居候もよし寮独在候て出寮主相も出上ヶ候
申候而出息ニ而候とあかさ川ある寮主衆と二人寮衆
点検しさへ寮主も相待させ申候て衆入衆杉戸を閉して又
申候之を相加る事なし
一 衆の御講衆の就夜中に而大衆又ハ中衆も婦ぬ迄も
相申七ツ時分より申候之揃を早て申る出衆に候
皆不出寮衆之夜（夜）中寮堂衆中に付揃衆仕出寮主

時刻出遊して下るをいふ寮主并寮内にまの世いつる
へ茶を受スべき寮主也ひとを待之寮主也ひに出る
ハし寮主拍出る手燭子并添数寄屋に入る事之
係時刻に喚（こ）拍子を添手と知し出上げて下るゆるし出入に
にと寮主挨拶して引挽きし退寮主引退らく
寮中合掌二三返而揃手付の方へよせ退数寄屋らハ
寮名つれ立之引挽渡しらく引燈ハ数寄やの
一 あかりの為に退之

一　銚子なきわぬといふ事之されとも酒様なるべからず嗽(クチスヽギ)手洗
ひ数寄屋に入ル事之スキヤスレ釜などおゐらい客ある時ありて煮鎮
なる時ハ一事ハ年料理なとの時ハ子細なくあるべてもよし
亭主の好数寄屋ある時を仕あるべし
一　客ある時ハ中立もみじかく其手水手まひ数寄屋に入ル
客へ人数の是ル時なるに菓子をはやく数積小客ある時ありて
遅速をもとめるあるべし濃茶仕舞薄茶も一二服くあるべて
ふつ須に随ルあるべし亭主も菓子などを相伴させるもよろし

汁附ハ亭主菓子を菓子主人へ入ル時に亭主楊子も出し上中下客へ出すと
みらト出るといふたゝり(たゝり)らいもし亭主へ盆にて出する又たなくと
ても上客の分出るる主へ出上下の客へと末席へ挨拶あらハ吞觴し
亭主へきえへ汁附上客の分ある時あり菓子吞ミ廻せも中客も末
客も是ハ定る亭主へ相伴させるある時とさとりて菓子をある時て
吞下事上手の入ル事之
一　然る夜中に集り事ハ亭主棄内ぞへに邪らけ気分なる
されど客のもてなし一亭主のもてなし兄のをす由しくし

其附の掛物まて手あつかるしぞうし先ハ雪月花涼風の通ふ

窓なとへ名を付る亭主の物数寄ニ名を付ケ申ス事

さうろうの名もんを付ル不申事

一　数寄屋廻の茶ち道具ハ其まゝ附ちるか上下共ニ水指用

其ニ附ハ上下共用不残あるへし然ハ中立ハ亭主の挨拶

次第ニ其の世ヲ洗ひて操たけニ隣入ニ申事ニ不合申し

夜咄之の茶の湯之事

一　諸会人数の客ハ先客ぬりといふ附合亭主の方へ約束して待

会釈始ハいふし其上ニて上客の心得ありて始終を名残にも

させ候ても茶し出のし風呂ありて末不及ハ亭主より次第の

ありて手燭を上客請取るる見らりて早隠しつ付待合へ戻りあく

其時上客手燭持りて皆々路次につき通り候しま申しゝてスキヤえ入

口の前ニおり上客より順ニスキヤ之座を見会合申して手燭ハ床

座見終（絡）ひそろ口の右りの方梅手燭をむけて置（挨）拶ニいたして

申ス事

総て亭主手燭手へ渡し下りて請取又亭主（不）ニ与へりて上客

つれにてうけ取べし

一 料理前に煎茶あらば一碗ハ宛あるべし主へも持たせ

一席に出し候とも別段の通りに出し一席に

一 袖入け掛る時ハ手燭にて見申ゆへ柄の方をむかふ

して見候べし 掛物に津綆のかゝり無ば柄に取見候べし

一 夜会雨室の時菓子都合雨室の間其外手燭と

いふても見候べし 名所に有る間もなきをのあらいも

手燭添て居るべし

一 後の時手燭お上ゆへ上座二客との間に置べし 其後手口へ

廻し置ながよし

一 脇より手燭見る時ハ床の掛物かゝらぬ時にして手燭二挺の

間に置持参見る事よし

一 茶の湯手燭あけ申さずしてもよき主中さえも終らハ

出てかりて後済て見候べし 亭主手燭にて庭口掃除

見て申すの

右之趣ハ挨拶の茶事に入用之見合せ第一之事

花の茶の湯に参る事

一 花の見る催合なとにて茶湯おこなはゝ上客ハ初二三杯
飲へし其外詩哥なといへるものハ当座の趣向ある迄し
亭主もむかしむかしハ花をうけ出る湯も持出る亭ヘスキヤ、
入る事し客の心得ハ花を初め其外万事の物数寄人を流す
あるへき所ニ其事し茶の茶の湯ハまつ家る見事ししして済る事
肝要也

埋火の茶の湯の事

一 手洗門ありて手水鉢備あるも手洗ふ為也し主客済て席へ
付掛の花生を外に見る其の尺様其の通に見る也
来客を待て水を渡し出し座席へハあしらひ次第ニて前の見合
可然也

月見の茶の事

一 月見の節ハ一ハあんどう出し其余ハ月に照らし候ハ座敷の
内ハ燭あんどう取りてらすといふ

一 月影まて茶湯なと好むハ中にも心得当つへし

猶云第三事

一 第三は竹の心にもたしく頭に様云あれハ万る句に無しなる事也
初句の心はたしく前句相子次第なり
　詩歌連合いたしける
一 詩歌何にてもいたしけり事も中にむすひ子出たりける事
渡し候ハ思案あるへし此縁あの出風流なさる又ハ出数
寄者の物数寄なとといふ初句皆いたしたる候ハ渡ずに
ふ及上手の一首にして渡し申すへし

一 和韻並発句出来ていたし抜足して囃ひ物る由し 又抜れ
まで又其人にも催し一会以後しおとも出来る
一 連々渡る並ニ付たる付合子細し
　砂雪隠まで調へ様之事
一 砂雪隠まで手調中にハくいクショウを立るの名の壁砂を
新しきたへ其くかきの外異紙十枚不字数調へ置く事より
奉行出す並にひえぬ柱子を置し出来人出来候之由にて
心付ありて調へ置之よしなるめ下されひまで以後きた下

もらひまて調法なしかさのけに礼ありて炉の方をのき
のけ申し是ハ次の客のためなりよりぬくき山をソクショウにて
崩し置く茶碗盆なと箸ハ常をもさくきふためなり
初も炉も箸まて茶碗をときふ遊し当時茶をうけて上に紙を
二三投ニツ目と手打桁ぢて取る是ハ平のよし是も合せてよ
給しむろハ其ニ而調る調ハされか海し亦能ハされハせぬ
がよし是ハ惣中ハせぬによしと合炉なるそあしく
候済ても通之初かさつけなる秘ハ候べき事也し

一 堂備右て茶器ハ置し亭主も茶碗被下客に
茶碗いたし末客をつきあけて亭主被成と上客より客の
合服ある遊し手付ありて上客の前へ末座茶出し
申しくす
一 炉服ハ亭主是も極末侍せす遊し 又通ひを是
極子取申の取にハ内に居ル遊し かねの葉の湯子
遊ハし急手て是備し其亭主も炉申しがよし 炉服
こんまでて当時のもらし 挨拶をして合せしもるる

追善茶の湯之事

一 床に香炉ばかりかざりて上客焼香の香を絶申事

一 座敷天目にて台子茶を点にて床へ備へかざり菓子出茶
以後手前にて外の茶碗へ出掃しまゝといふぞ肝要也
茶碗拭ふし外の茶碗をあらため茶を掃し湯をわし
いれ又点て出之候客毎へ中ほとにて後の時湯を
同じ様に点て茶入茶杓袋で同と也申候之

一 三住居ありて只いませうのこゝろよし

一 何にても初茶湯その子々孫を付申候事之追善は人への送
又は生物を嫌ひ魚類など決ましてその余れも初へあんさるぬる
まじき事

一 当の真茶にかぎりて茶道具付かざりて薄茶濃茶など何の子
細なく客の前にて薄茶ならば前に付置よりて床のまへに
引つれ立てまゝ付立置とり持て子く子を洗ひ立置申候
茶席に置濃茶点てなり又天目の茶なりともわかし外茶
碗へ掃く申候之

一 初而来ましく床の前に一礼して～何の子細なし
客も上客ニ指候て候此飾中ニ及ぶ事也
一 後座ニ而も大方何も角も台子の世ましく大事にとて湯
盆子茶碗をも川小の世話ニ而文台事ニ事 茶筅ハ氏巾ニ包
ましく而て 後座の下子三匹中ニ之碗ましく おし袋に入
前へ而て おしまひて 並ニ置申也袋ハ嫌ニ川子抜入て置
なる也茶碗に水を入れて引出し外へ入ましく候ても有りてある也
左候て何のことも無くおして置べく申也

一 モツリウ お而て箸をそ流ニ付し置べき事也ニ足なき
らむ牛を揉なと包事もよろしく付ま牛ニつきて出
しけ之其時分 より 働事也

香の茶の湯之事

一 床子飾ら而落葉好候をと包べし 又上客 次ら而初入に
出香炉出飾ら而嗅ぎ申候事出置しまへ戻シに
前付い一吹嗅ぎて過ぎ 上客へ戻り付 次之左ら而 二客より
香を出香出次ニ成る出嗅ニ成る之とりに香を付置に出す

二疊より床まで渡し置し二尺五寸二疊目へ渡ス東疊より
上疊へ床ス上疊ハ分二尺五寸へ床ス二尺五寸掛り之上疊懐中の
香箸まで次第ニ香盤左わりて下地の香をこぼさず香合
の下の蓋へ入る時ハ中のこぎん盤をと段わりしもよし香炉
斗なりとも下地の紙へ並べし
一 概なとする香炉飾まゝくゝる袖又袂取出炭の灰ニ不置し
て摘んして床へあげ置中ニ立ぬ也
一 利口ならて嗅候事之香を子細なし あまり 香を子細

の人までも香會の格ニならぬ格業が却もあれど法をもち
さ川ニ於まし座を働又客婦といふ家の作法ハ業れ卯よ
香をきこのせるまでまで継香一入と作法てよし本をさ且
それぬ格ニよる置し

餞茶の湯の事

一 客何も作法なし茶を所望ありても生の中より葉茶
なぞ取出仕候ニよりあんさゝして二尺五寸次客の時宜ニ随
ふせられ候事よし

坐敷待合之事

一　刀かけあらハ先かけ置申事ニ候座敷にすゝむ時ハ備通る
事也

一　亭主の通ひ口にて辞儀ハ無用

待合讃歎の事

一　讃歎ハ客の掛(?)ひたるを亭主へ見せの為之上客何の
詞もなく客掛ひたる客の数(?)と君の知らぬ掛物ニ而
て亭主ニ御客の数をほめ(?)と感心いたし申候之掛物(?)
好ミにて申掛物等ニ見つきニ申事也

押かけ菓子之事

一　押かけ菓子ハ残らす客来挨拶致し挨拶ふさ(?)き亭主存(?)
し今日ハ菓子出候ニ付急なる出菓子出来(?)候仕度等致し不
申候仕合に存し押かけ菓子持参ニ付出来候ハヽ出かく
られへと申ふ亭主より挨拶通り申候ニ而挨拶次第をあけ
待合の客ニ而一礼申る私(?)今(?)申客方出菓子出かる敷(?)坐敷
推参之客出来席へ出かくハ亭主より御下出待合へ

承り其後御床を拝し夫ゟ御茶席之作意なとを
いふ亭主ハかまよりまハひ茶席に出
一スキヤまてハ何にても亭主あけかけるといふて却かけ
掛もの又ハ相伴ニハ何にても思ひとて述すて致し
可申候

御客人御相伴之事

一スキヤにも茶入口ハ初に通ひ口ハ亭主相伴あり
客人御相伴有之ニて事候ハゝ又中之座敷にて客人

横に床ありて壁に座し 壁に床ありて 横に座し 肩をちゝ
畳ニ居る也 腰ニ之
一戸障子あけて客人を通す也
一手水の器をもちて上る手拭新古共上る
一御刀とりてかけにかけて上る
一かうりなあけてあげ御茶之後出まい手洗ひスキ
やへ入ル
一何よりも飯の時相伴なんきつけ飯を盛て上る也御茶も

存候之御申しの上手を請ニ存候
一 御挨拶うけまて御挨拶うけられ候て御傍上り居申候挨
うけて御座をつくろひ候へし

貴人御見廻の時

一 御亭主の答ある迄実居候
御茶御出しなされ候て其の器を右の向へ直し只手に頂く也
給べ候とて御亭主にて其通り其の上にて戴き候
味ひ候て飯をも仕舞之時は茶碗上へ置き御礼を御申付候

下されといふ御料理人ハ御出しの時出入の時見て拝し申あり候は
何の子細なし御亭主へ御料理の答は御あいさつ申候て後ニ
右にも上座をあけ直に先へと申上候是は末座へ
御あいさつ申て後亭主まてハ御亭主へ答え挨拶ニ御座候て
あいさつ致すべく候

一 御退出の節御かへり候て挨拶をも申し亭主の名
ニハ手を実居申し此外様子に可致候
概まで茶をも所望せられ候へく候

一 床の下地の通ニ枝飾置れ後なるもされ末ん易女又ハ同
間ふかくむかふの所迄も深く不見き者飾可申候事之
一 他流柳之飾枝ニ存候柳其の前ハ精く下地の飾
枝をも拵置て通ニいたし置可申候得共ハ志やくニ不
及事之
乃ち所定して見可申事
并 おし枝之事
一 風呂釜の前何にても花葉の所まて見可申事

たて置ものハ寝せて見るよし床ニ置備ケ候ておき
し置可申候也
一 立花之前ニハ枝ハ花也生ある花ハ生花其臺挿ある花を以花生
を持ハ水葉とくと根を切葉まてよく其葉の根ニ付
せおき可申候
一 水さしも同じ所ニ葉とくと根を切おき可申候
一 瓶ほとりハ瓶を其根を切出し可申候
一 さくらハ葉をも其枝を出し可申候

一 亭主しもてなしを嫌ふ也と申候

菓の語より起り

人に出しいたし候事

一 先一番に縁次の掛物 書スキや何事を出して かゝら
口あり又二枚障子出て かゝり口かゝるといふを後床の子
掛盆を御出し 果合水さし菓子菓碗菓籍代花生
花生を御出し申候 菓合又は花生なとを 御出し申候
人に飾え出家仕候て 御出し申候 料理も出家にて出し申候

御出し申候 菓子を出し候 其後 絵を見て後申候
飾立候 結句物しかるへき挨拶合ての孫揃
あらまを初めて 後の事は出して 御出し申候 出家も
縁に乗組て出しが爲之 御出しを挨拶しに 出家は謝念之

極出仕候事

一 むかしのひとおりて 縁に出て 会席し料理も出て 給仕
持せ申候 亀甲出し候といふて 割して通はせ数枚に
いたし申候 蓋菓子も 後菓子も出て 其後 給仕させるもよし

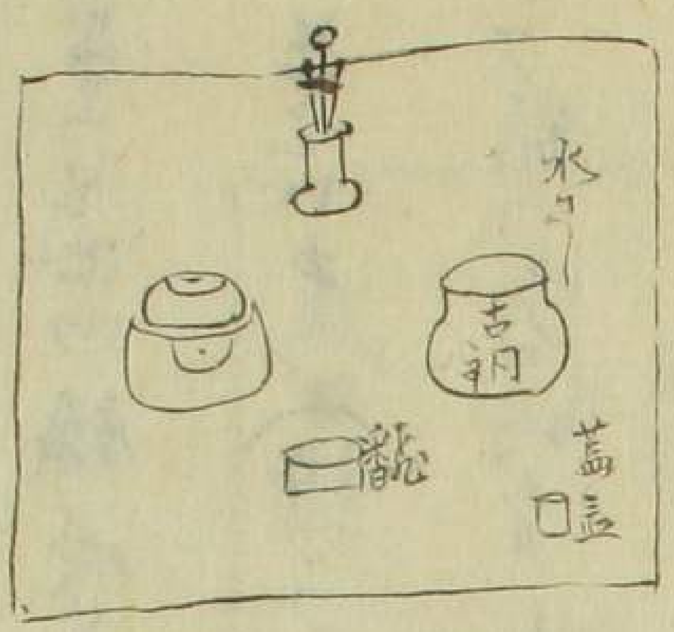
又中立をさせぬ為花を而定して其為ニ成事もあらは
飾付事あらは手水打候て又後座入花而定ある
らは生花ハ花あけて座るよし客ゆるしして
御座候よし掃除なき様ニ見届して可
申事也

待合まて亭主出向方挨拶之事

一亭主おかり點前を出る之時亭主出迎ハ茶用意
惣合という客ハ出迎候事という之一通り之

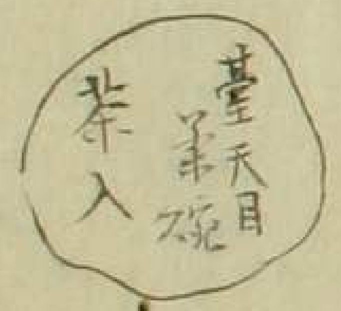
亭主出迎しハ勝手ニて客ハ出向へといへとも左候て
待合まて客中合袴ニ着候て又ハ袴半着用にる
客上下の時客ハ出迎にて袴ハ次ニ立客の上下ニ而
可然候事又キヤに入座して時客ハ次袴もなき
事也

真七ツ飾



風呂なり川 絵風呂
上 ゆう川 組

一四疊ノときハ蓋置水さし之方ニおくや
一爐をきるハ右ノ刺（かり）なるハみ（水）すさし用ゆ 右ハ蓋置あ（た）ふりなるハ右の方へ
おろしぬく蓋置建水ノ向ふへ置

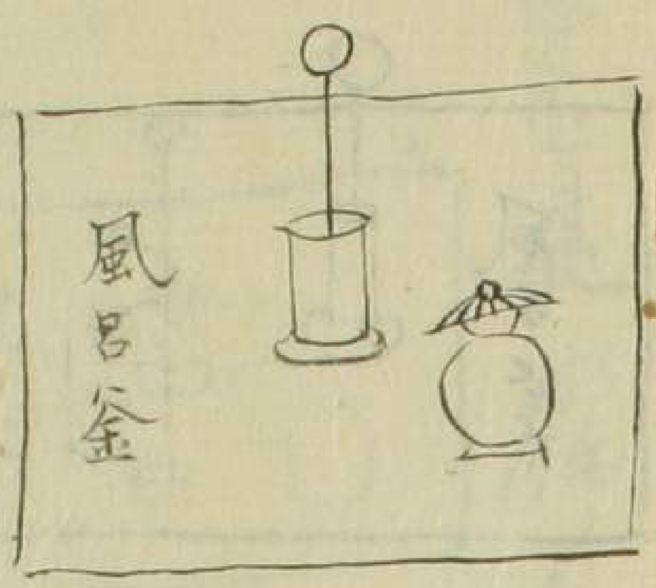


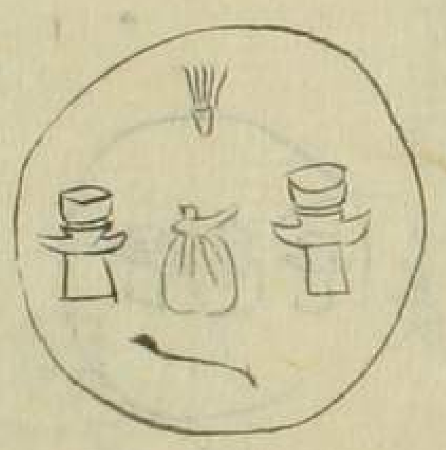
一 此釜を紹々川入道んといふ
茶碗二ッ中に茶入れ云

一 釜は車軸や 弐寸の蓋子釜は一寸五分釜二九釜之車軸

四平釜
是も七ッ飾やうつさしは玉の輿ともいふ 抱桶之
是は弐人飾二人くらゐヶ様ノ組合
ヶ様之手前有りて一行の前子基にては茶の葉の湯とちらひ
釜に利休道安のおもと和尚ゆくや

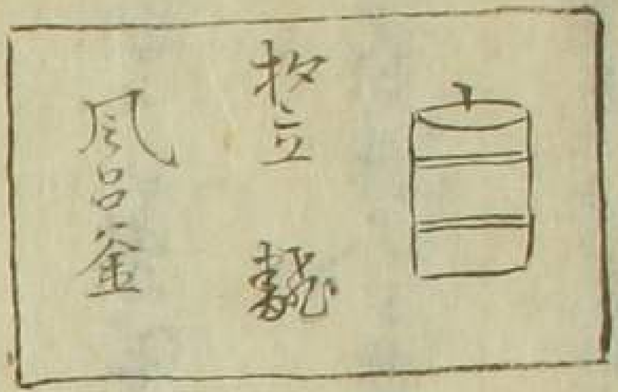
一 是も六ッ飾や





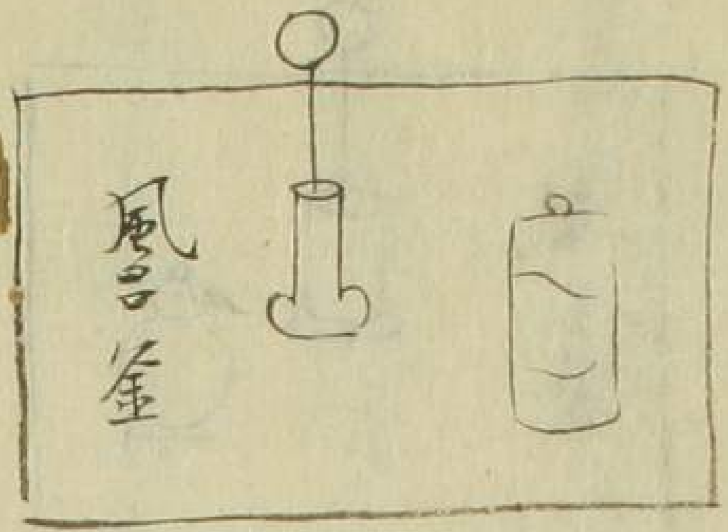
一 子細にふ枝に蓋を置かさて二ヶ所のけて五飾といふ上ノ組合
前の人茶筅茶杓を持って是を五ッ飾といふ

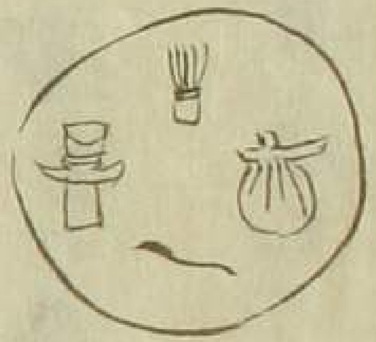
一 此手前はまへのごとく五月より茶筅風呂と植ゑ
ころ炉の蓋を置き用ゆく茶はまへ有る也

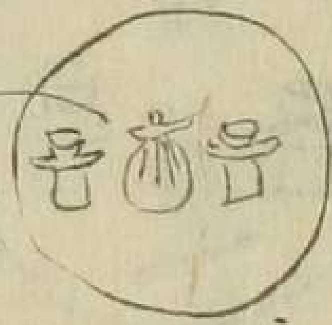


是も五ッ飾之柄杓あり上を四ッ飾と云盆の名ハ四ッ入盆といふ

是且 つなき手ハ菓子器同し名ハ菓出ん菓杓何れも



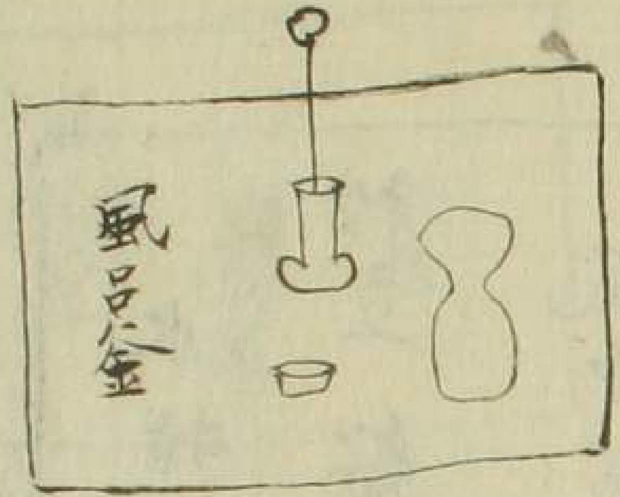


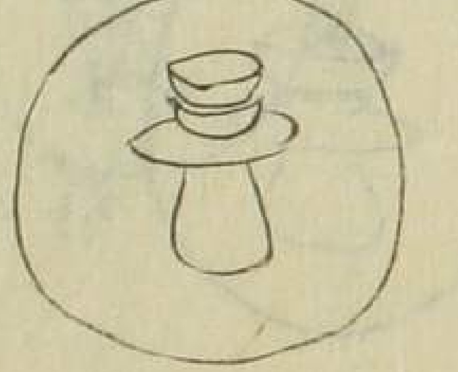


盆ハ名もなし三ッ入とハふ

三ッ組とも
天目茶入と
三角ノ組合

一 臺子建水飾何れにてもよし





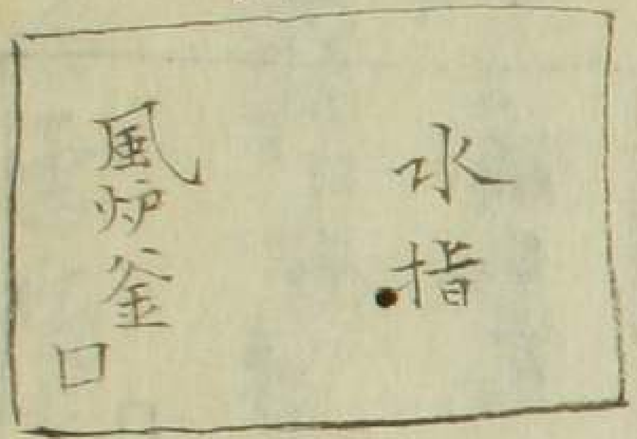
一ッ盃と云

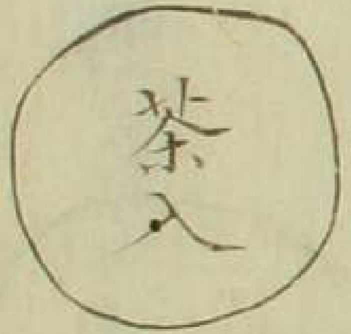
一ッ入盆とも云

紙風呂釜飾を川のうち茶と天目もさひも名物ハ一個やけ肉勝劣何れて

一くくのうちなし

三 飾



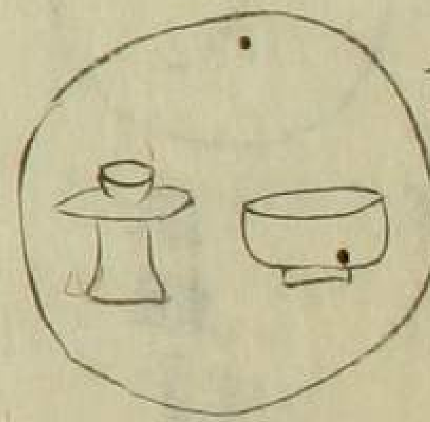


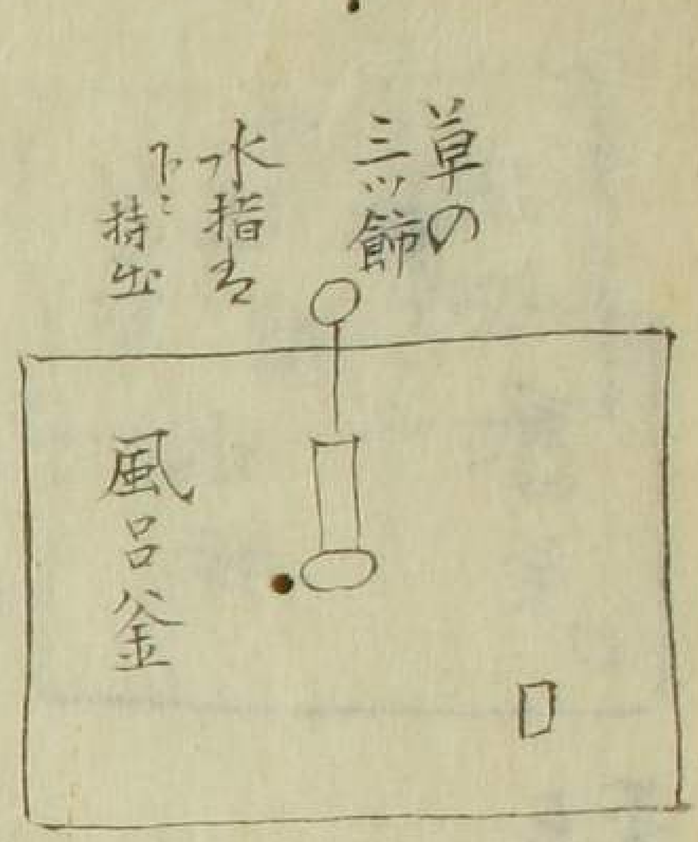
点前盆の名なし

菓杓盆ありて名なき

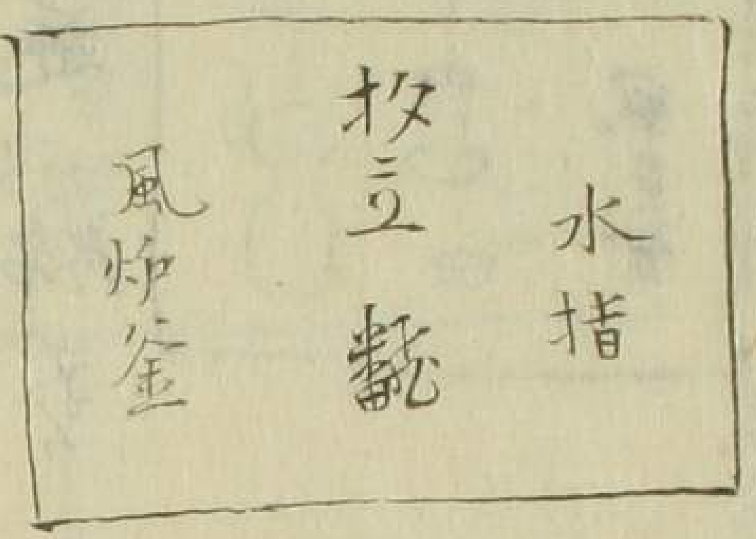
流組を流盆といふ

天目ゟ茶碗勝手ゟ出るとき

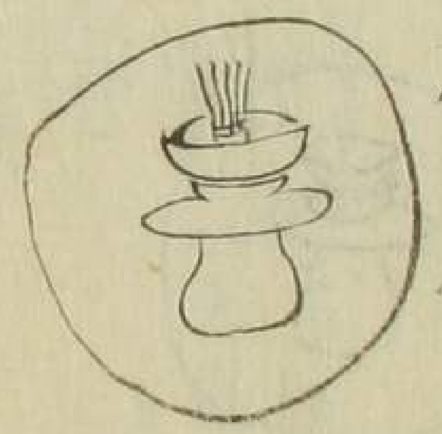




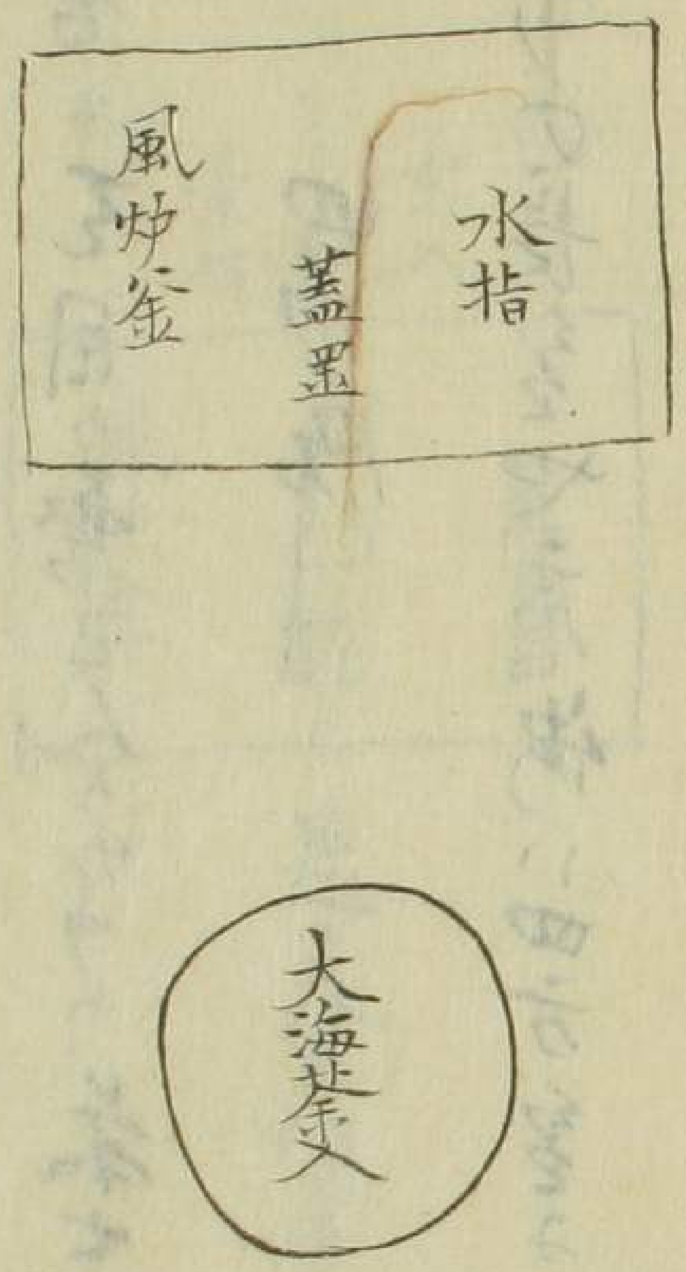
是を飾る事ハ風呂を細口と云間棚なく並台棄合と細口の間柱の
内との差中に並秘事又ハ茶道ありて風呂と細口とする事よくや



水指備前作宗好



杉立ハ表総之簾をもの笹屏南なん中ハ土用ノ釜形を好ミ只



是を三ツ飾や蓋置名物之水指の手前の事柄杉立一向仰ら

其のたゞいハ瓢同前

一 盤ハ本ゟ利 下ハ折手ハ備中てゝるな利

一 此手ハ茶碗なく三色の茶を一ツと并てそちておかる 是ハ

六ケ 口判

一 此台子のかさりハ茶碗名物にあらされ共なすくれるときハ天目

井の上台子の上きかべし

一 一番ニ水指しテ柄杓の中ニ左ニ指柄杓立右ニ置かるや

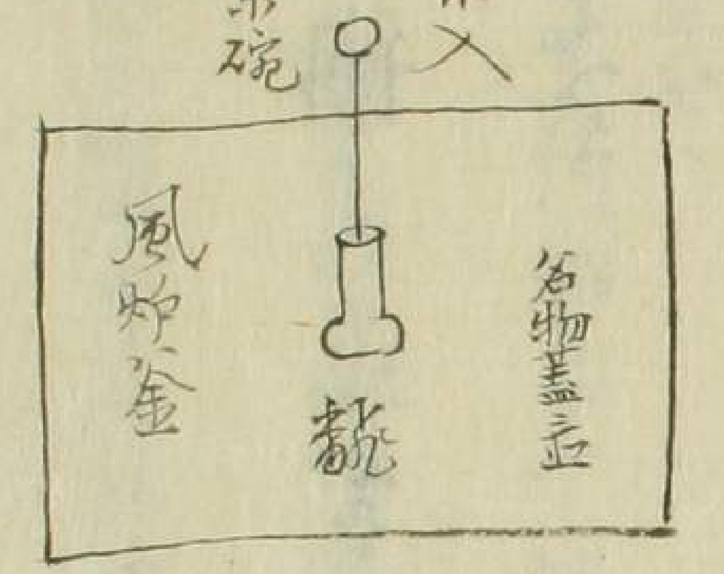
二番ニ天目ニ茶入んかなら茶七服目のごとし

四ツ飾

一 上ハ二ツの長盆也肩衝ハ四方盆ニ乗る也長盆一ツ通リ時方盆

の茶入茶碗ハ名物なれ共かくのごとし茶入半隠し

しも勿論方盆や此にハ天目なと之判



是ハ天目組合ある事も同断

此台子ハ一番ニ水指持て出てかり子台子ニ右の蓋置を

左井の上方盆の脇ニ置水指能ニて立し水建をすゝ乞ニ

蓋置ニ住テハ人ならハ二枝なにあらしし老人ならハ茶碗

あらし茶入等ハ下ニて立なる判

略
三ッ飾 図

本水指	風呂釜

おとし蓋やき

珠光好ミ壺ニかくれ家を好ひ合せかくさとくをそへ始ム

ましや

水指ハ唐銅といふ金ニてつくり又ハ土ニてつくり上の組合のおとし蓋

入ハ肩衝也

一此手前ハ水建子柄杓のせておいつもの通ニ並出ス茶碗

おとし蓋なれハ蓋を取て茶入をおろしいつもの茶子置き

茶碗を並ニ蓋置ハ出し柄杓をのせ元のことく風呂の前へ一手ニ寄て

壺ニ入れハ茶入ヲ取る也其の茶巾を取てれ風呂切りき先風呂

の中も谷茶の口も出るなるゆめ風呂とりふたも利

略
三ッ飾
茶入
茶碗

水指	建水蓋置	風呂釜

水指
好ち宗易茶をきらふ

此飾ハ能阿弥の作と云傳ふ蓋盆ハ東山殿の象仙ミてと
いふ

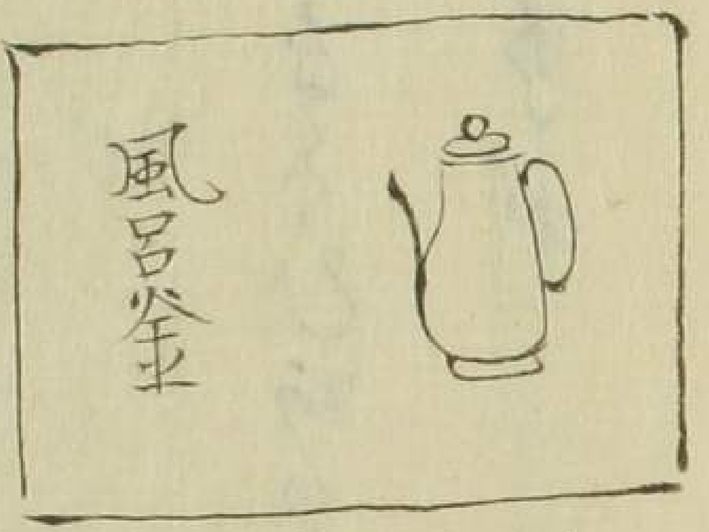
一 上の茶入なるかなつめハむかしハ数寄の方の上ニ上中下の三ケ
きりをとミけ下の茶碗共ニハ其ニ袋ゟ碗ニ置ニかしらせさせる之

一 此手前ハみさしニ柄杓のせおいつもの茶ニ盆葢おきをかし
まへくかし釜の蓋ニ葢の前へおぬ中ゟ取持して柄杓をのせ盆
之但ゑざきハ水さしの前へ左右之茶巾ハ三角の茶子盆

此手前ハ一番茶碗二番柄杓蓋盆

能阿弥
金輪寺

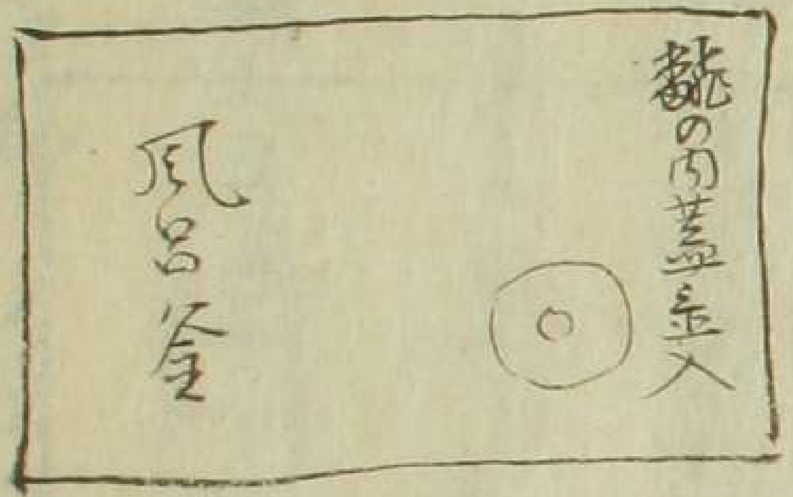
二ツ飾



水差ハ湯桶といふ

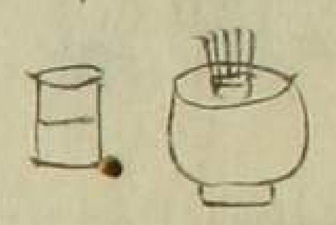
能阿弥
略之
二ツ飾

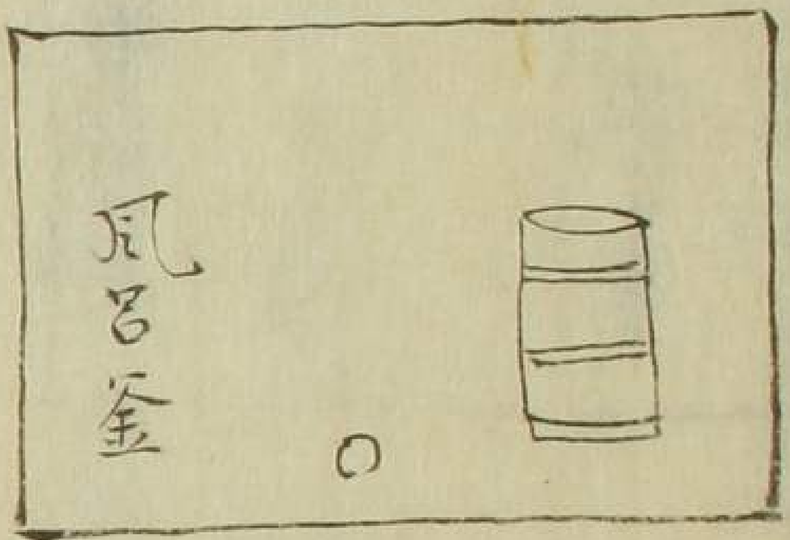
回
香炉



上ハ香炉なり古き定等
むつのきとゆへ今ハ
不定斗なり

珠光
三所目

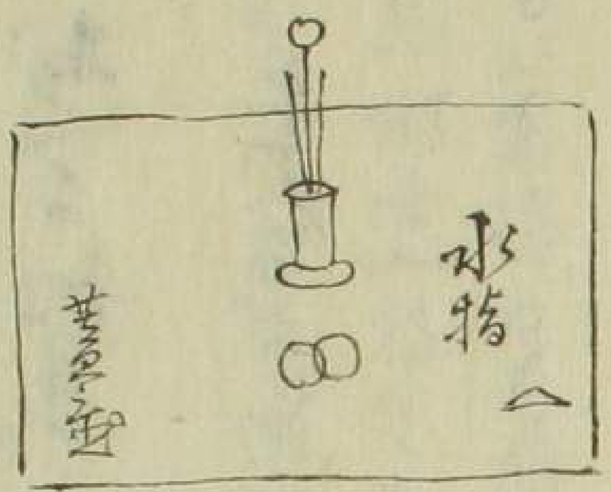




水さしは手桶を杉の目のこまか
なるを木色にして輪六トヲ
上す口たて[illegible]所 つのひしゃく之
塗手桶は紹鴎利休也ま

薹子は三ツ飾之の事 炉のあしの高く三ツあり[illegible]その上に
中置之
一 風炉は大半のなかへひ阿る[illegible]釜[illegible]のかいらもの
や茶入茶巾左に[illegible]利

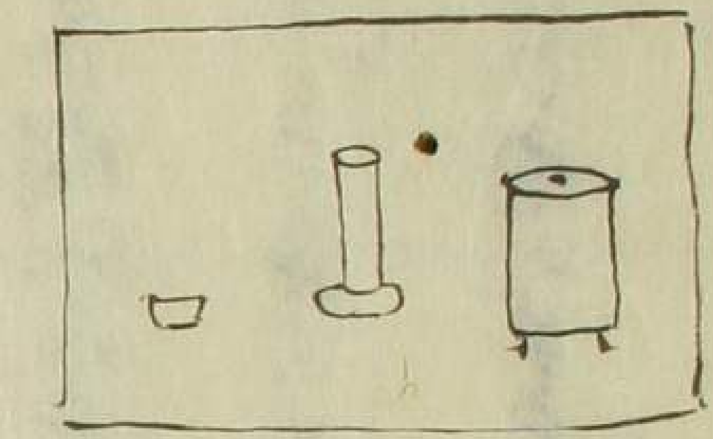
圍炉裏手前飾方



台子の半[illegible]相手書き方とし[illegible]
[illegible]利[illegible] 次に添て入れ

一 炉と台子の間へ二寸又寸に置之
一 此手前は[illegible]座敷[illegible]薹子を[illegible]呂の右の方に置候事
主の居所[illegible]の間之薹子の[illegible]茶は釜の蓋の左に置ます
[illegible]此[illegible]二置なり

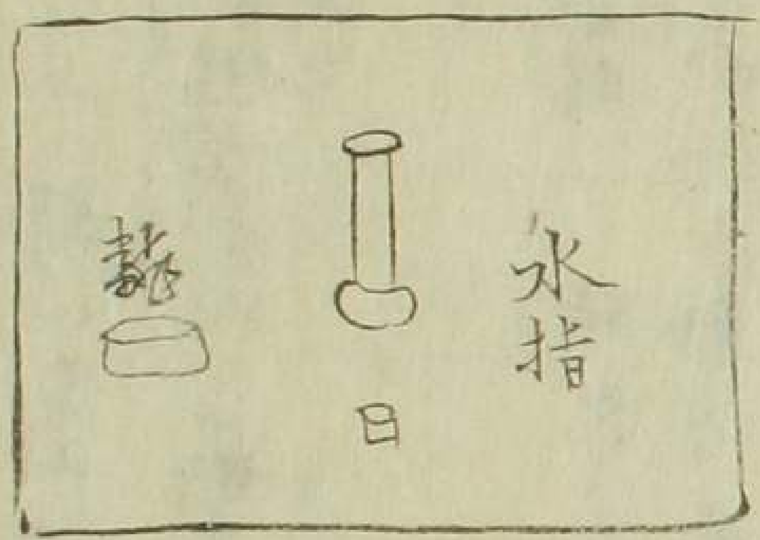
茶入



是ハ茶碗水建二種除て四ヶ置之
柄杓ハ前茶入ハ一ヶ所なり

一 此茶入おく事秘事有 初入のおとし風呂あるに居て火氣を嫌て服ニ立合せ立之ケ様のハ余るしのゝたり忠専之宜文習有り

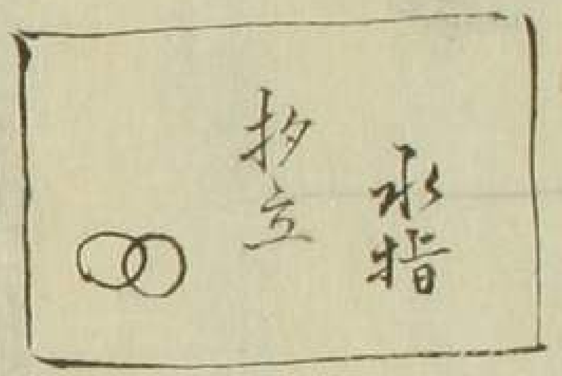
一 其菓子の茶巾より前掃除の方字ハ道具もて下座と心得立立へし掃除てくる字よの上方之様大事なりてある



一 子器一番ニ茶碗右ニ目々持て右柄杓の右蓋子上ニかくて立茶入おく手置の右ニ立右水建持て立座ニ立蓋子置の右ニ立水建もて夫目右ニ持て立茶入の僕ニさいき如常柳の右置て蓋と取置之

此手前は先の上の二種を取りし以つもの外に水次いつもの座に置き
つゝみ袱紗にて取りし棗を座に直し前のとおり柄杓とりて
茶入るゝなり其外は前のとおり

香合
羽箒

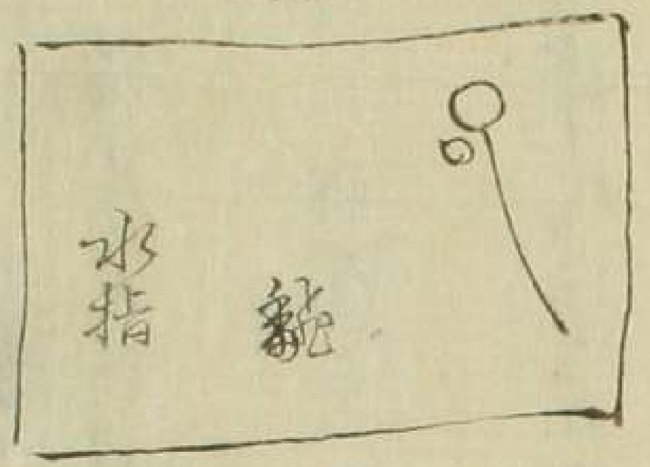


此香合なる物は中の四ツ飾といふ
物にて棚を引き飾りて道具と書
名といふを余の通にもあり

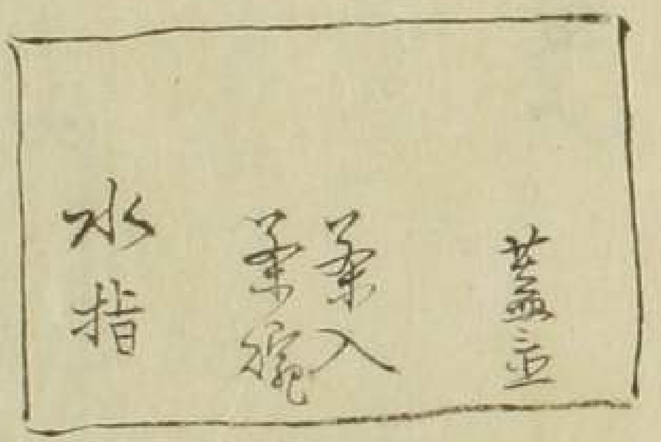
一 手前のとき前のとおり有り前に置きの中へ棚を置き座へし

左勝手

手鏡

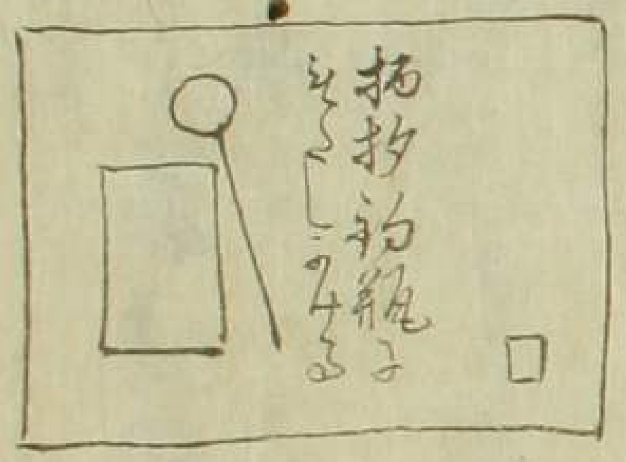


但なとこにも飾る手鏡様のなる
お秘なり



水建水柄杓持出る

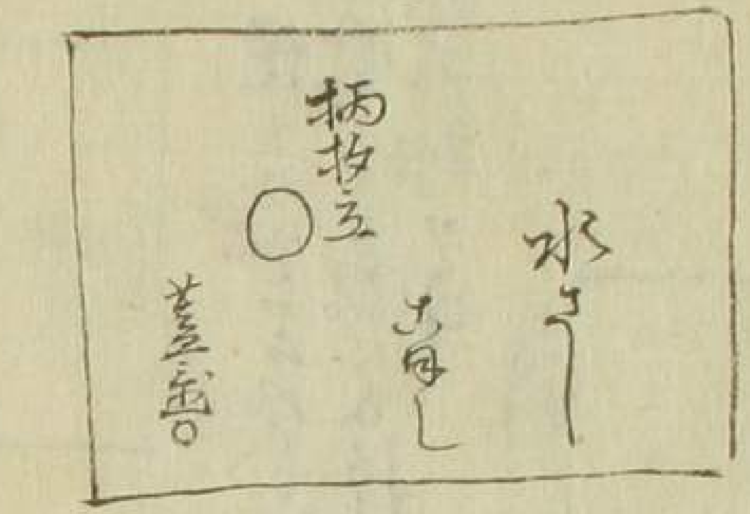
此組合上にも飾るなし



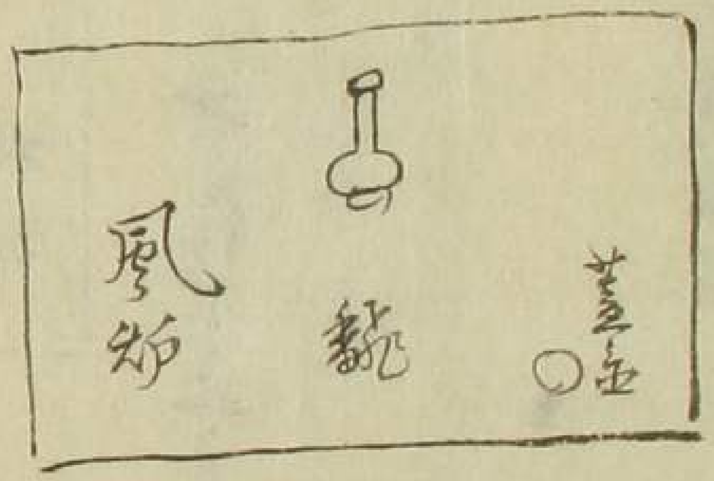
右同じ手桶同断
但し柄杓も組子
左右手前にまへなれ

一　柄杓を右ニて取左ニて盃を持そゝきふる之儀ハなきのとき
柄杓を左ニおろし前後の次第まへのごとし

右あかり



左あかり



一　蓋置の置所ハ三ツ宝の図ニ在之
一　三ツ人形ハ羽織召まし
一　竜宋人柄杓ノ節おとし 蓋置ハ横ニすへし
一　穂家香呂柄杓引節 上ノ隅や何ケむけへし
一　駿駒なすゝぬよふニきふへし
一　小板ニて台子取もの川ハ小板ニ残をもつて置中ニ置へし
一　棗ニ 大中小何れも 茶ニ諸家入

一
大乗 薹まうきもよし 二ノ字
中 薹口訂 二ノ字こおしゆるめて先へ〆へし

小乗 薹巻きて立 胴・横
大浪 海 一手ノ乏くて立 緒ヲ使ひとまるとも
おしもゆるめたしして上二ノ字ニて〆メして角ニ

志ほげ 大海ておすし
中次 〆めさくさ見くぬよふすへし
濃茶の節ハ 二ノ字ニて上前ニて〆へし

一
包丸 〆き括 朋様
むすひ目ヲとき右ノ手ニて押うけを向ふニ乏くき又右ニて押うけ手まて
ニて立て丸をとりへ梅くさ前の方へ引〆くへしすくこゝろ表
立とて四方さそき

一
楽焼 様ハちいさき香合ハ其もの尺さるゝの
白擦用ゝ 不入 形 さる〆くのるへし

一
古田織部 記 茶杓
うすおし乏くとまて〆け六ト乏斗まへ 香也
かんさき

古人好献立覚書

菓椀　鯛あらめん

利休好
大輪ノときおよろし

向　鱠
なますた
鱠（セゴシ）まきんかんノ輪切
煎いりざけ

同好

同
志ね魚けをにしめ
うらむけて二ツ切
盛ノも何利

同好

汁　小鯛　三ツ切して
上宗旦二宗旦中三宗尾
尾

宗旦好

二度目　上宗ハ中二宗尾
三宗旦　三度目
上宗尾二宗旦三宗中

精進や
大徳寺汁

牛房魚ノ婦ノ数
七ツ程ニ切ぬて
よく煮て
汁椀ニ山盛ニ盛て
うす味噌汁かけて
出ス又汁替るとき汁次ニ汁入て持出汁次ニ手盛や

二度目ハ不

向
いさへ鱠
婦りをふるも何利
婦りを作身にしてさ鯖
或ハそうしノ鯖一切ツヽ
なまくハ湯ニかけて

宗旦好

直に涼水にてよく／＼冷て
ひやし 豉みそにてよく仕立る也

汁

利休好

おぼろけ 大根おろし溜りよく煮き
黒ごまを何しくれ
けんちんて 山椒にて溜くへし
けるしく へ煮候て醤油へし

汁

あつき 十粒計
志ろ汁ノ製ケ何しも煮てよし

汁

みそけ
むしん
まんこん

自然後篋ノ
菓の内にまを里
御自きけや

精進ノ時

飯

そろそろまま
豆いそろそろにて
溜まおし ごせん盛切

向汁 つんこん
麩 大徳寺汁ゟ
赤みそ仕立にて
よく煮 菓子椀に吸出へし

焼物

きすゞノ豆腐焼
豆ハ きすゞノ尾先
そて 一ツハ みそ漬
一ツハ 塩をして 二ツを
焼よしやくへし

少菴好

日 ぎみち焼

鱧
もみぢに骨切にて
毛をとりて骨ぬき
こそげゆでて身
やきて出す

向

かつを鯛
ほしてかます
なまくいろ湯でし

同

うなぎの白焼
せうゆノ汁かけて
おるも何う

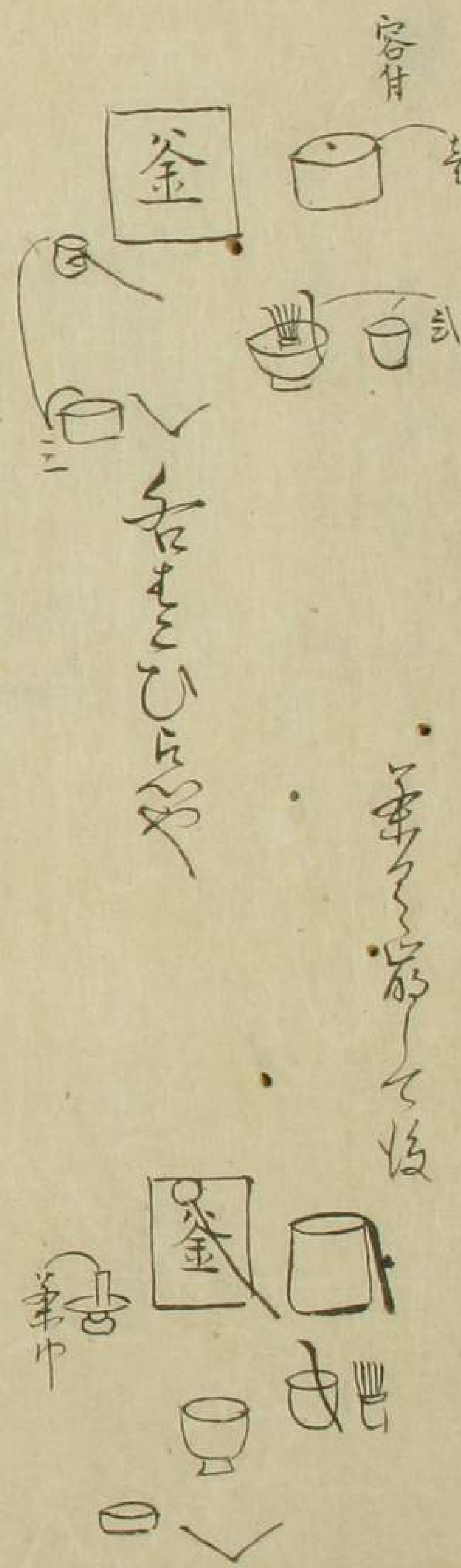
菓子

栗 せう油ノ付やき 二ツ 四ツ 皿

汁

八幡牛房ノ津ばく切
是ハ瀬牛房利休ニ而且恵ノときノけん

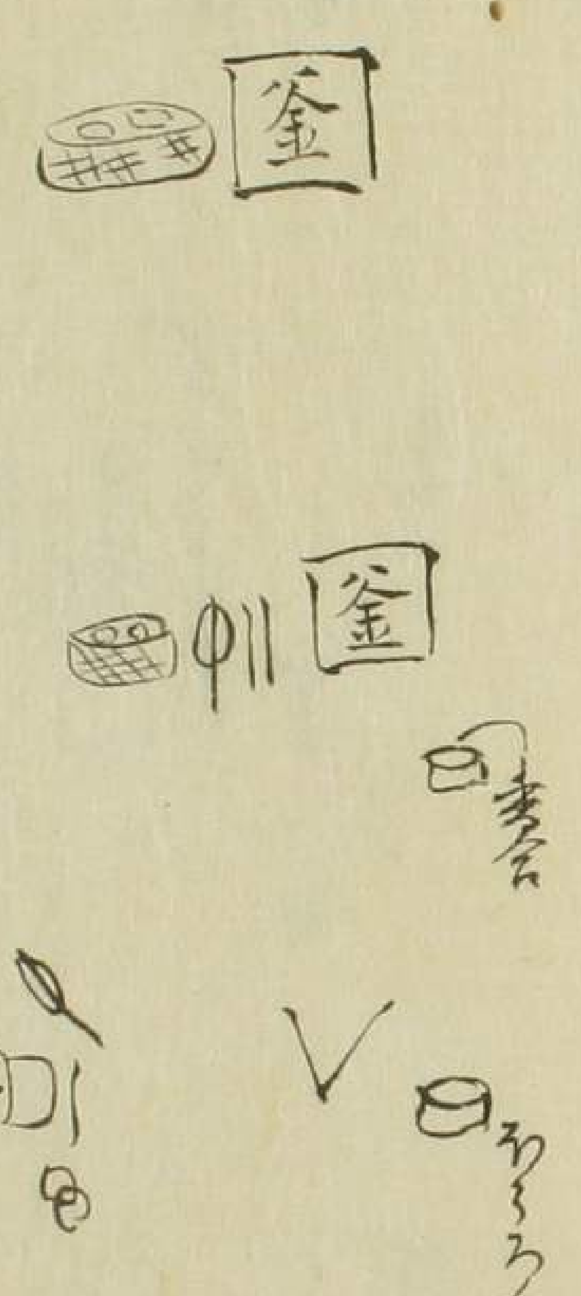
小板



同炭

同左

同左炭



京板之居様

向ふ山ニ置 端午節句十月より九月
又ハ右小板なきには右ゟ前へ方

棚之のまひ節ハ四本柱の時ハ柱前二本柱の時ハ釜之ゐん付か

おしきま之方ハ先之方へ柱有柱ニ並べし

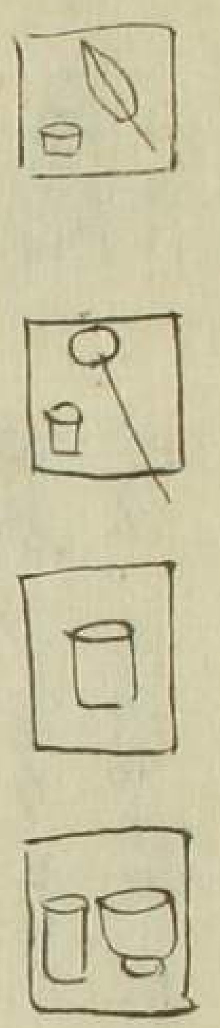
一 濃茶ノ節 茶巾小板安付ノ角ニ並べ茶入ハノ節 茶碗ニ入

うす茶ノ節 茶碗ニ入節 安付へ置て 水茶碗入

養老湯と水とおしやく入て小ゆびにて何ぶんて埋ステ二滴そてすき三
水入て茶せん計之

一 薩棚 中ふかの段中之手まへ柾段中ニ置合せ立へし

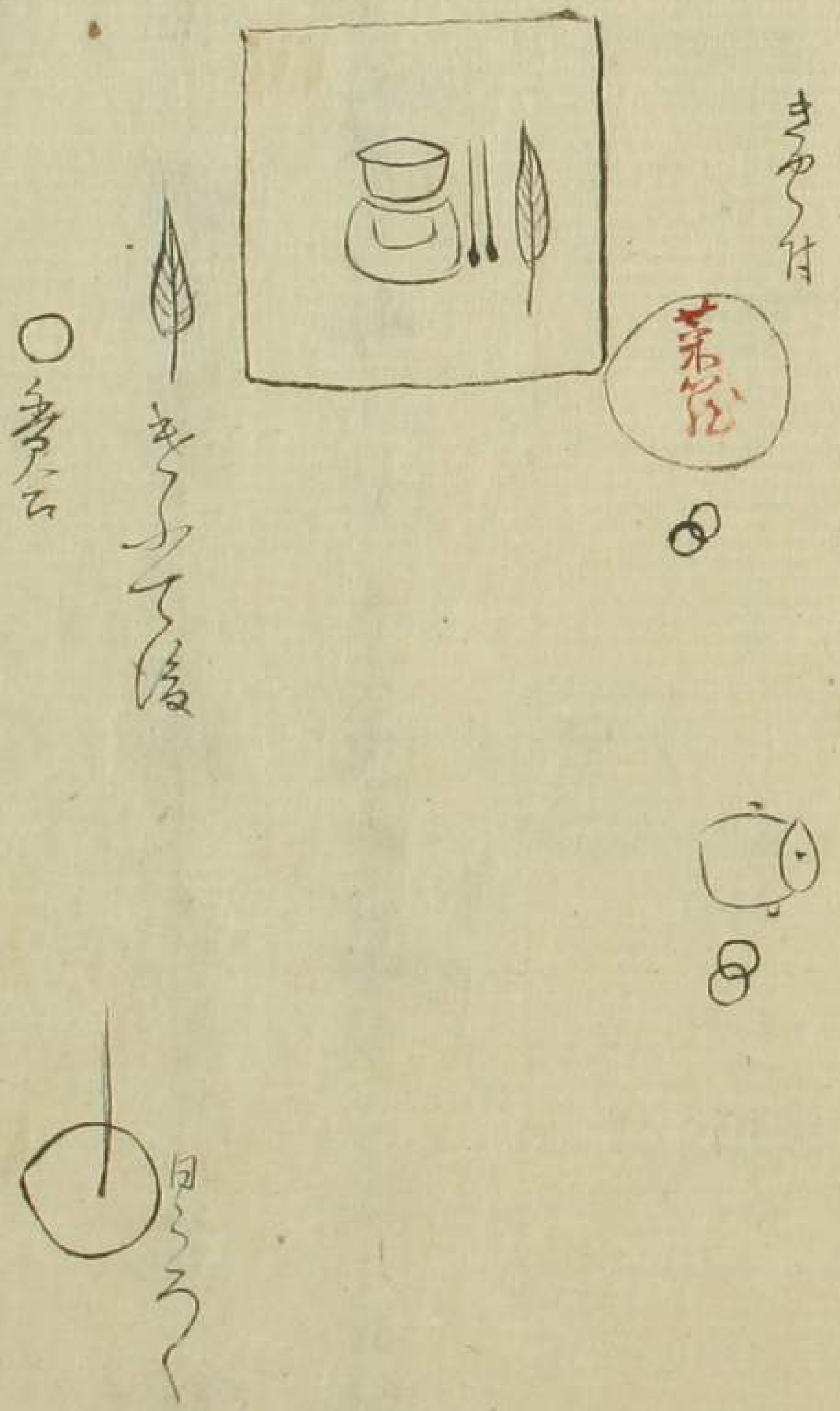
棚



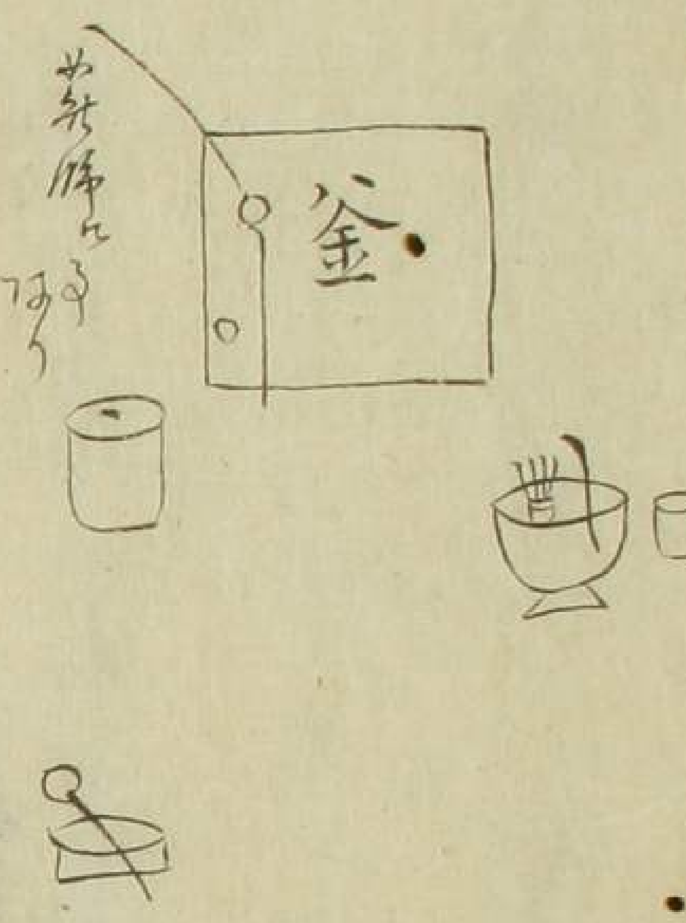
一 四方棚 釜くさり付おしまわして立へし 木ノ台なか付

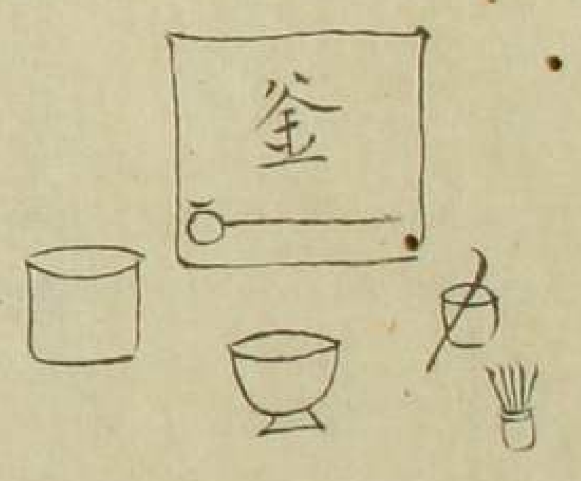
一 江岑棚

段中かけ四寸上ヶ立
横 段中ニ置中之
大板炭



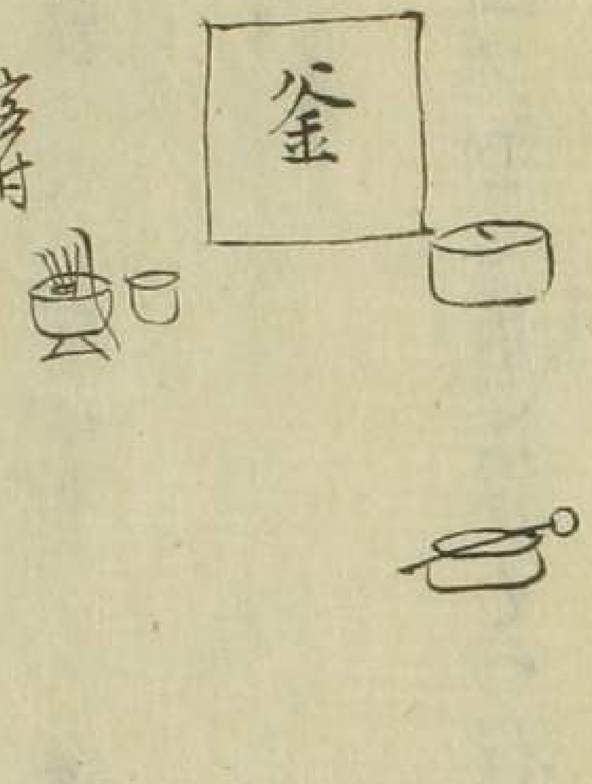
大板本勝手





此たしく濃茶之節ハ水差前ニ茶入飾ル又客付角へ飾ルも
河ノ袋勝手付板之上釜向ふ方へ置茶巾客付之板ノ上柄杓を
上ケてかざり置へし

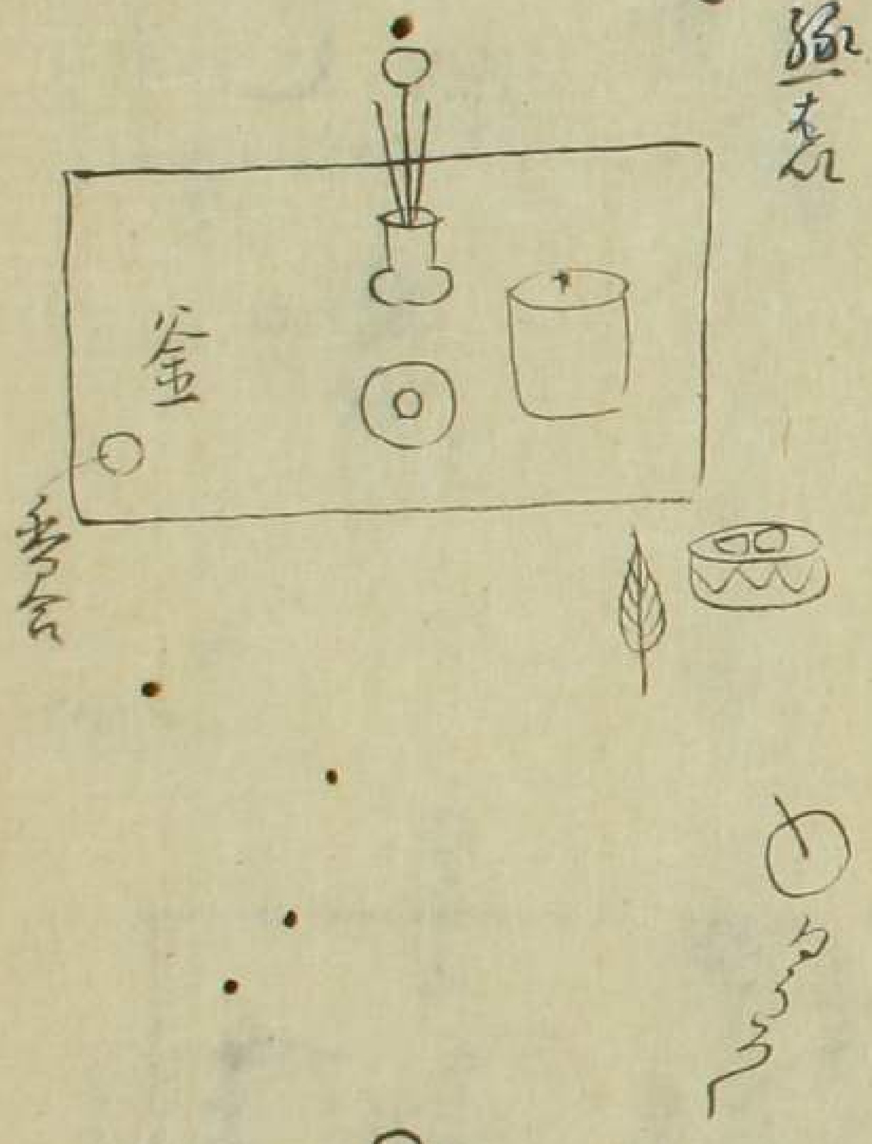
円左勝手

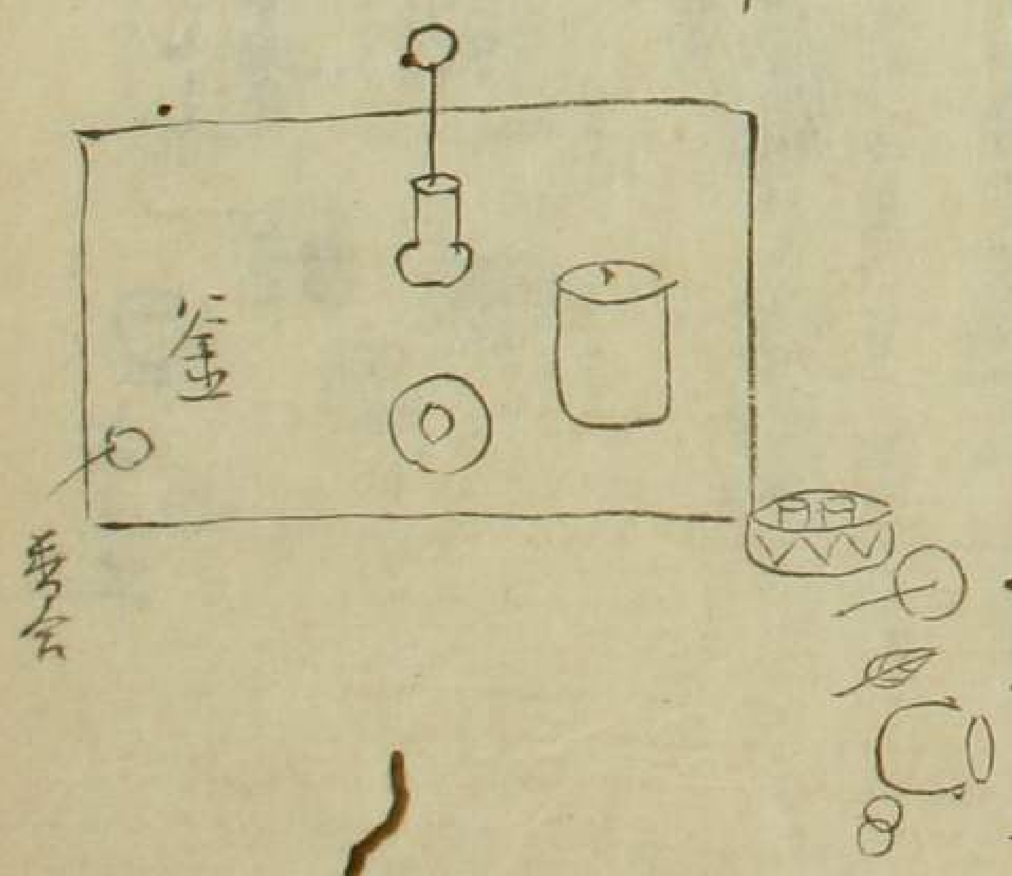


諸事右の手ニ而扱ひん結置へし

長板本勝手

[illegible]





同

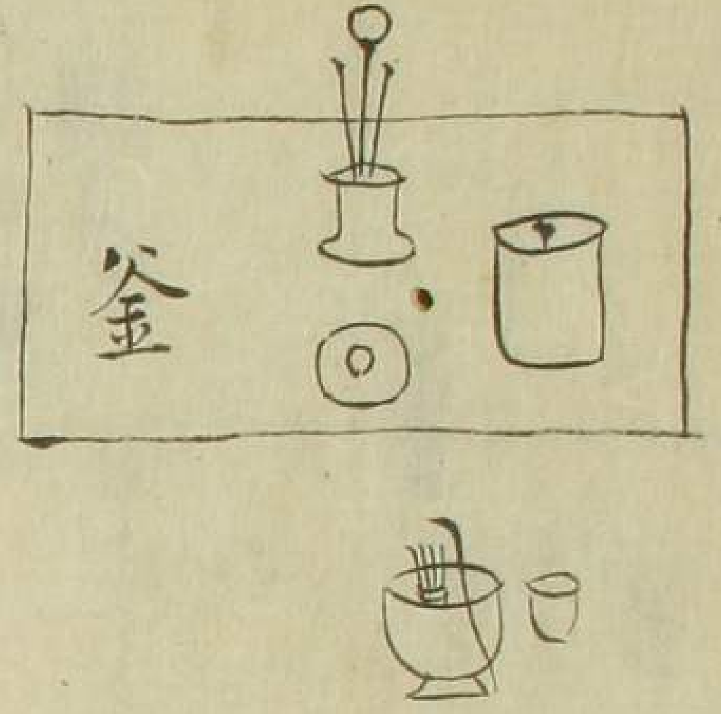
濃茶之節 茶入水指前ニ出シ勝手付真座ノ上ニおく おくの方ニ置べし

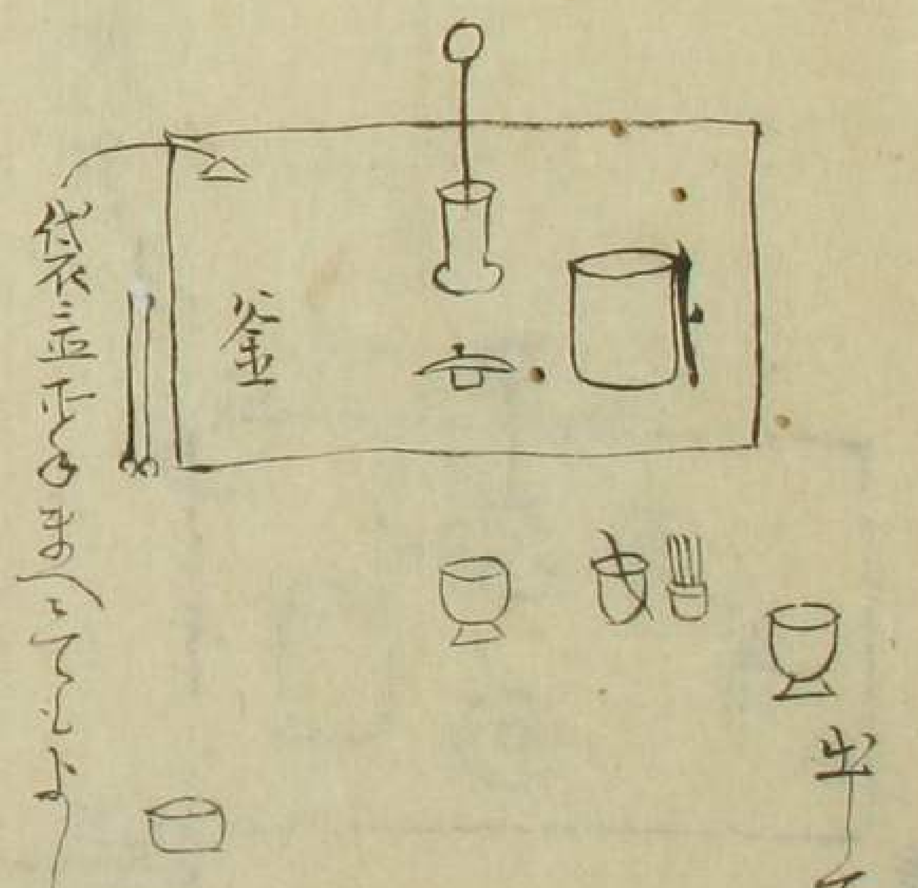
点後

一 火箸勝手付ニ建水おろし 蓋置おく 柄杓入置く 炭ニ茶巾

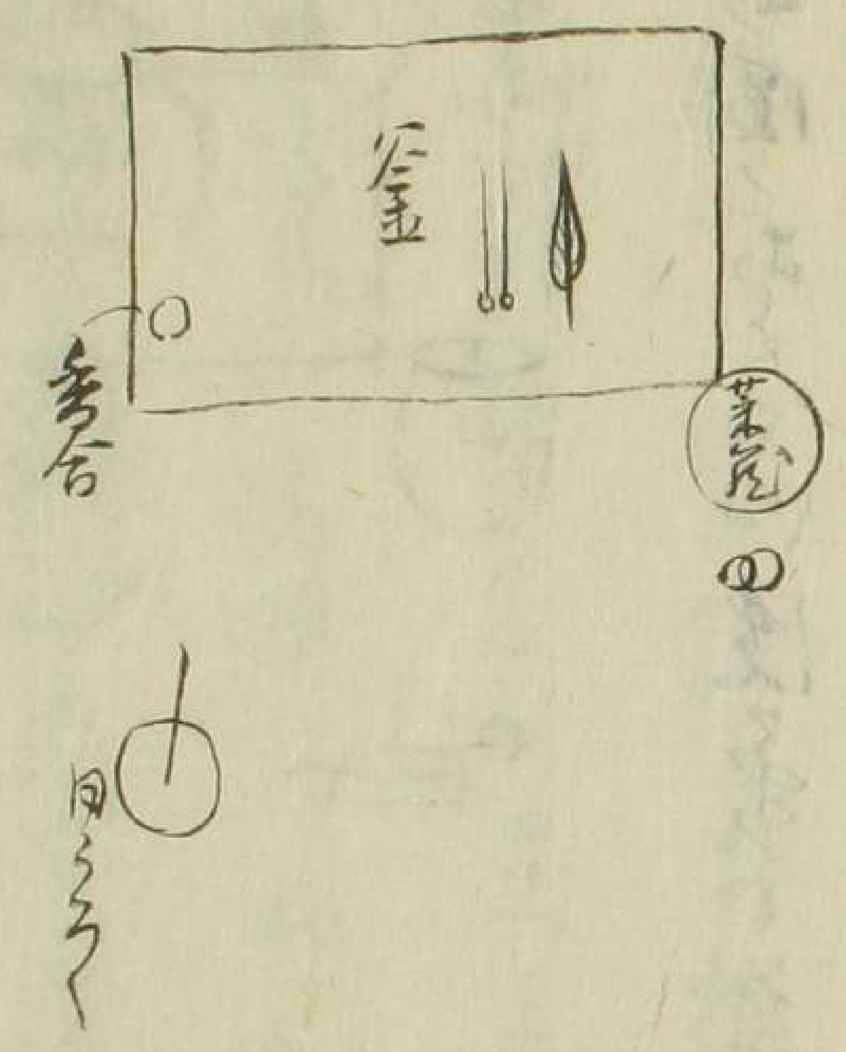
水指ノまゝ

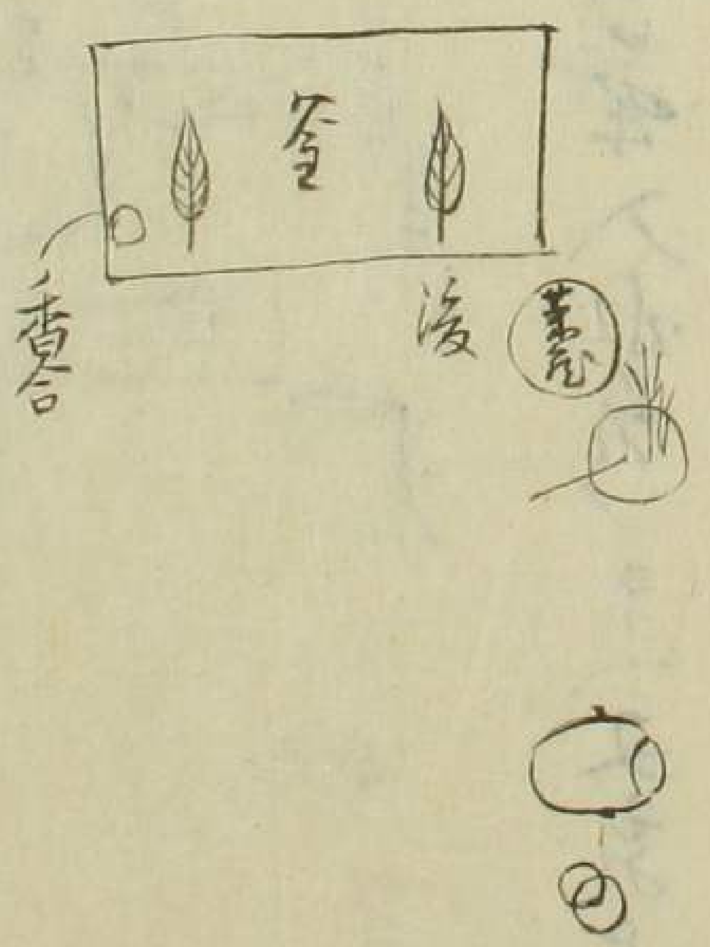
灰斗 灰匙も二ツ置も 風炉のまへれを長板ノ先ニ置べし





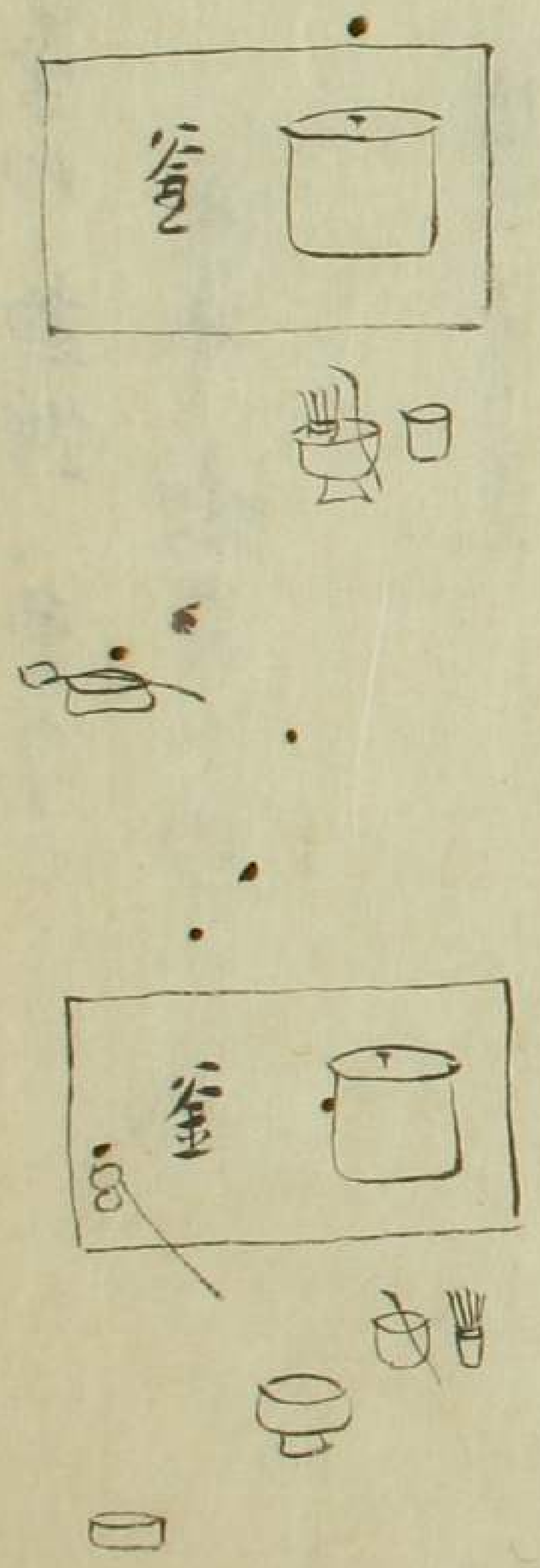
一 同 置





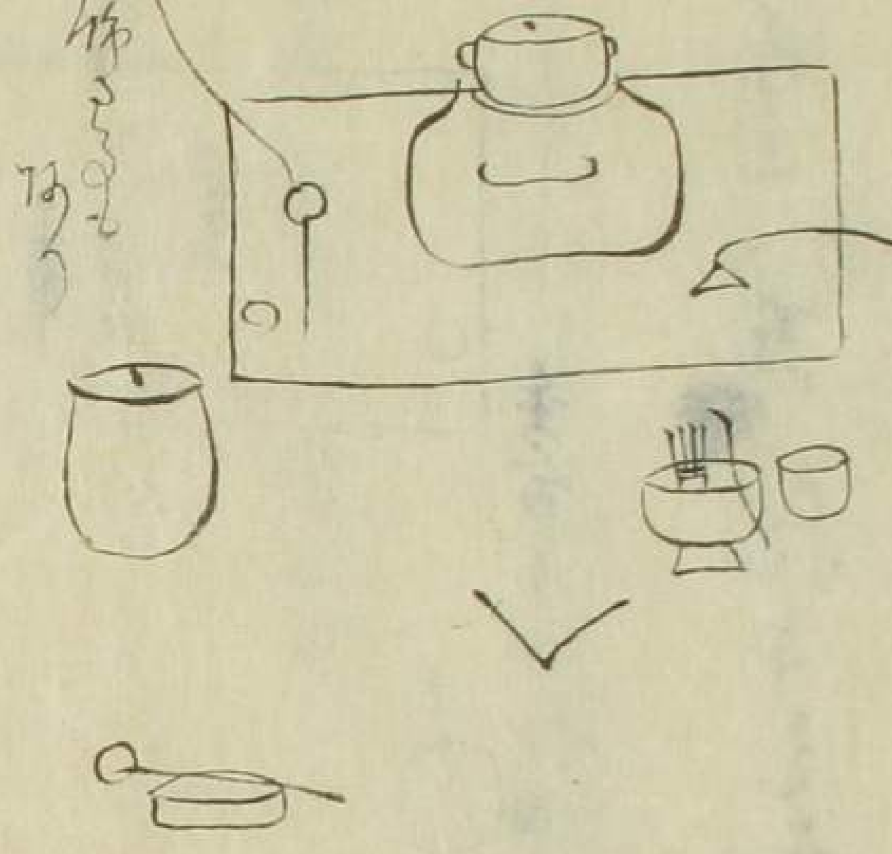
右置手まへ 左ノ勝手之節 此通ニ残ス茶也

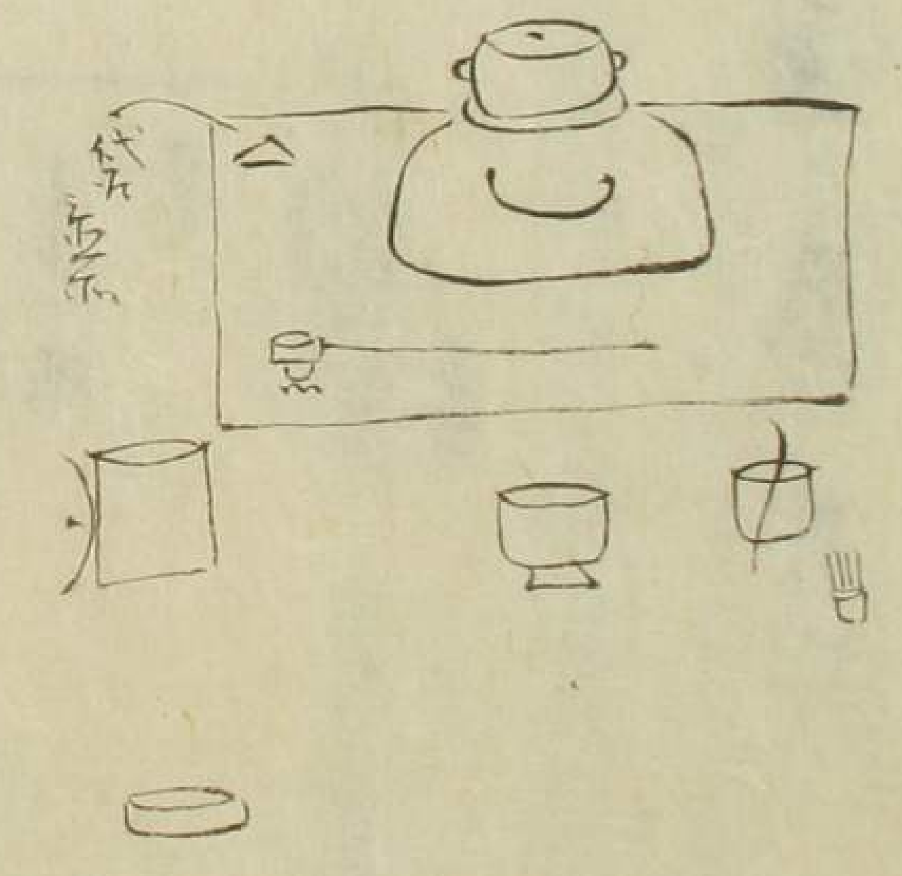
同二通飾



濃茶之節ハ出茶巾 建飾ニおなし
茶巾 水さしのまへ

一ツ置





本勝手ハ此圖ノごとくや濃茶之節ハ茶入水指ノまへ又右付の

板もの飾へし 袋 勝手付 板ノ上

濃茶の茶巾 風呂の右付まへノ方

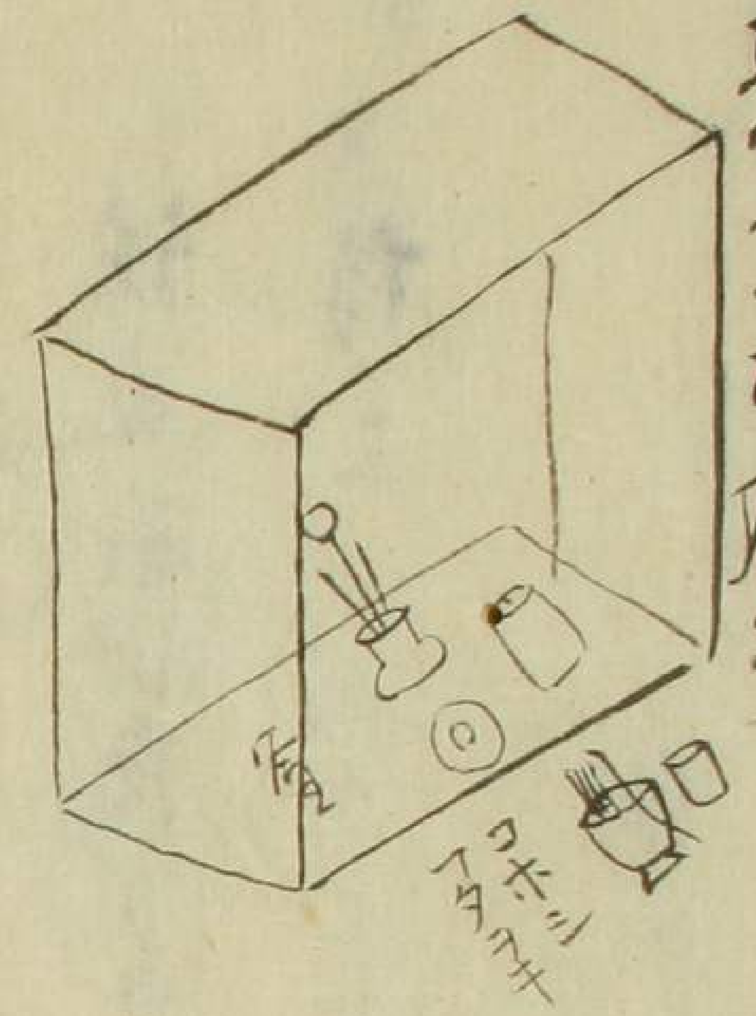
左勝手之節 諸飾ヲ好ノ置之

水指 勝手付 茶入 茶碗 右付ニ置 建水 勝手付

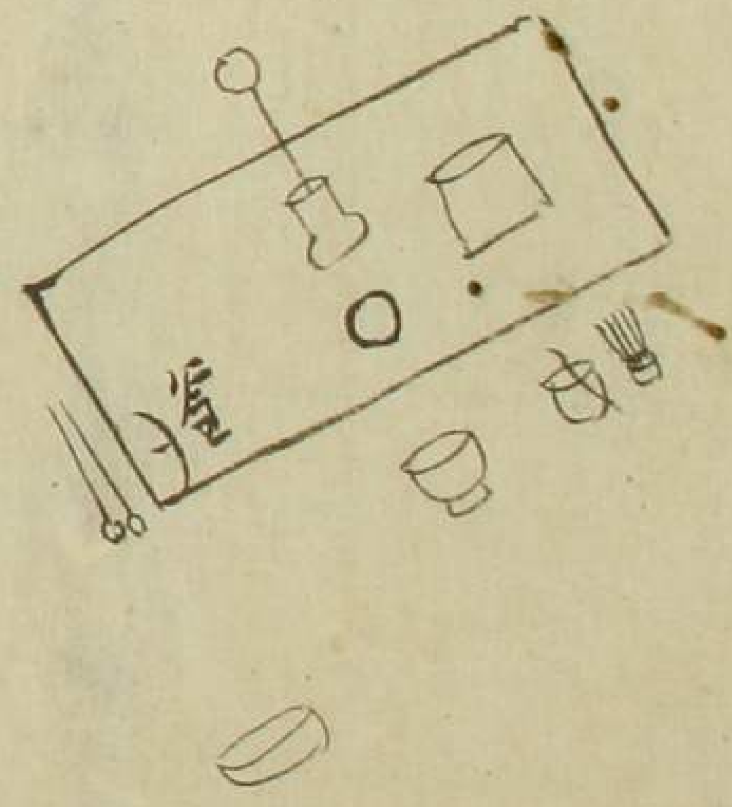
諸具取扱右之手ハ勿論 諸色心へ有へし 袋 勝手付

板上

大板ノ方
臺子下ノ勝手



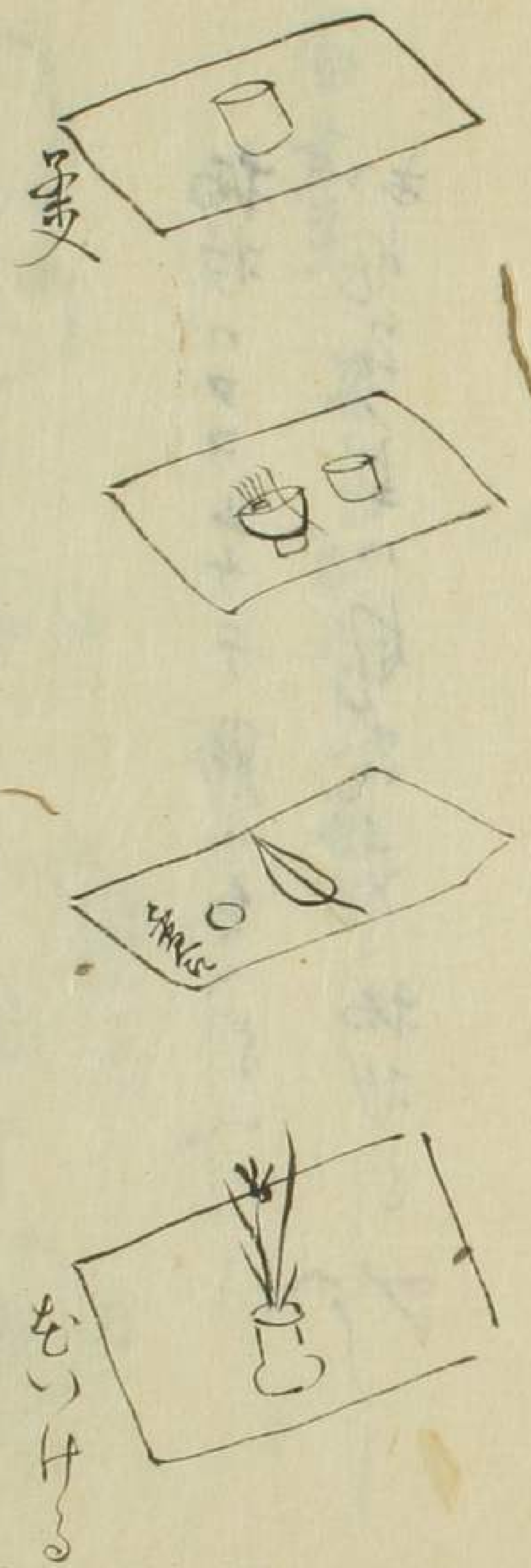
上板



柄杓入用之時者入用柄杓ハすくニ柄杓斗ニ置候ハ一畳ニ而置合也
勝手付建水ほとニ而蓋置都而建水勝手付ニ而茶巾之所
茶入水指ほとへ又勝手ニ付飾候ハ何ゟ茶巾水指ほとへニ而置上
椀勝手付角ニ飾るへし　礼飾候様

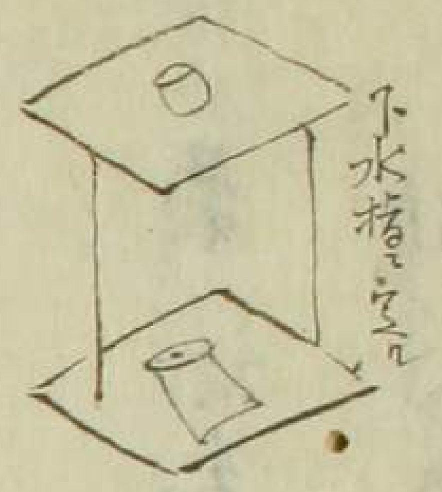
同炭手前ハ長板惣飾之如し

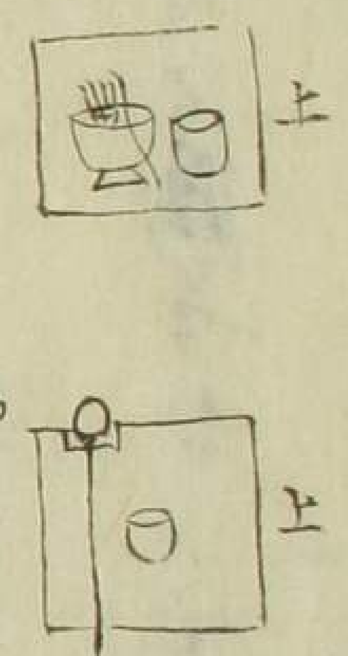
同右之前諸色客付ニ勝手付ニ又前置之
諸之品近ニ候

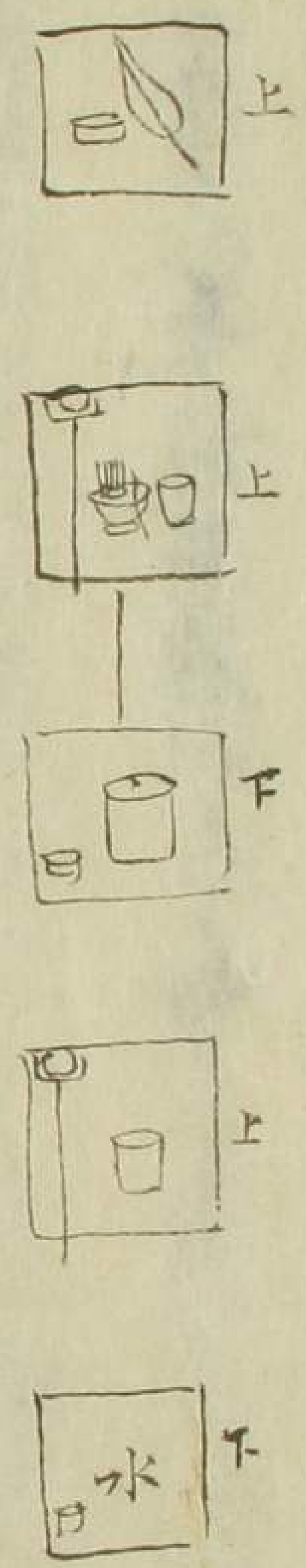


四方棚

右飾風呂と台子の飾りの置合 中ニ置
又勝手付ニ置 風呂と面向キ也





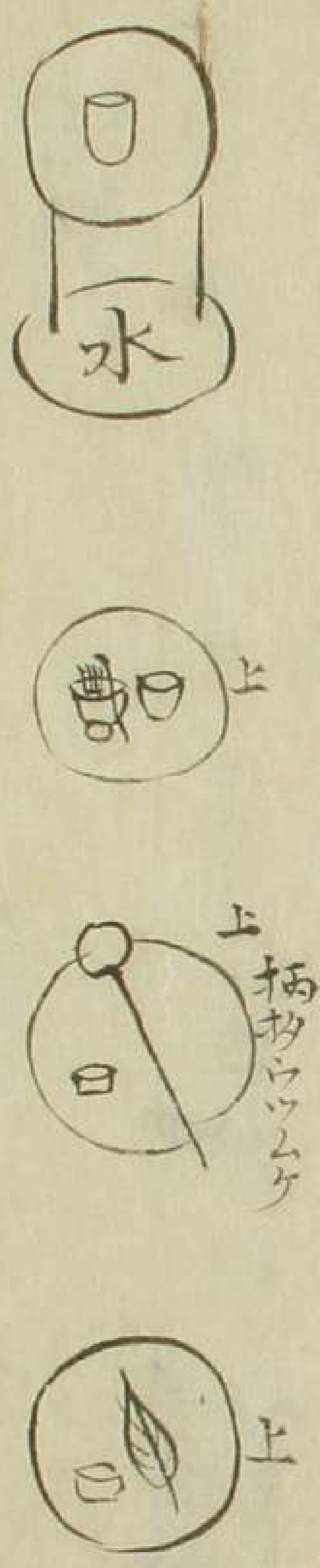


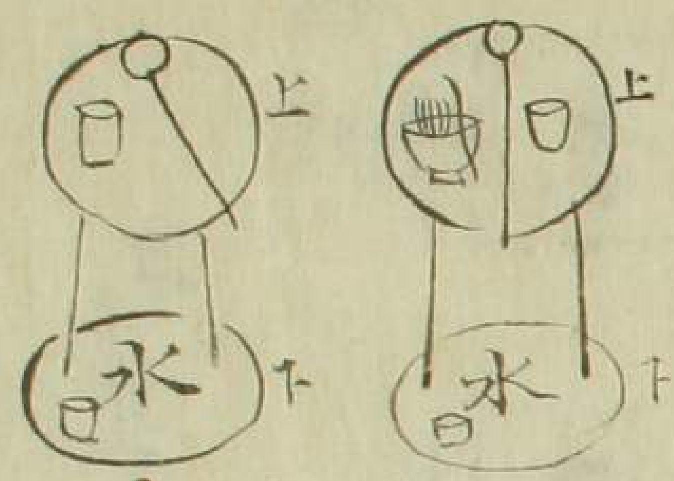
蓋置柄杓ノ引ク蓋置ハ
上ゝ上ケて飾る也 従る柄
杓蓋置の飾り同じ

柄杓ハアヲムケテ勝手付ヘ引ク
風呂ノトキハ風呂ノ方ヘ柄杓引ク

丸香台

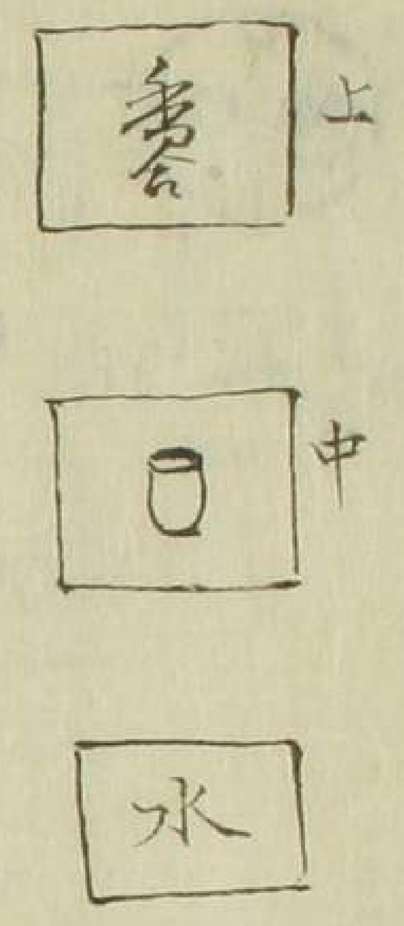
是も風呂面向





四方棚丸香台とも飾方ハ同じ
風呂とても同前なり
柄杓も風呂ノ勝手付ヘ飾る也

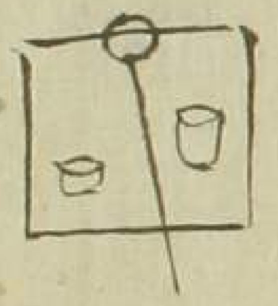
三重棚



弐ハ左 打様

上棚 杉様 左 香合
又ハ 香盆 羽箒とかざるべし
中 四方棚 丸香盆様 おなしこゝろえ
下 同断

一重棚
丸香盆四方棚ノ上棚ニ同シ
但 柄杓茶入茶巾下 一方棚飾事同前

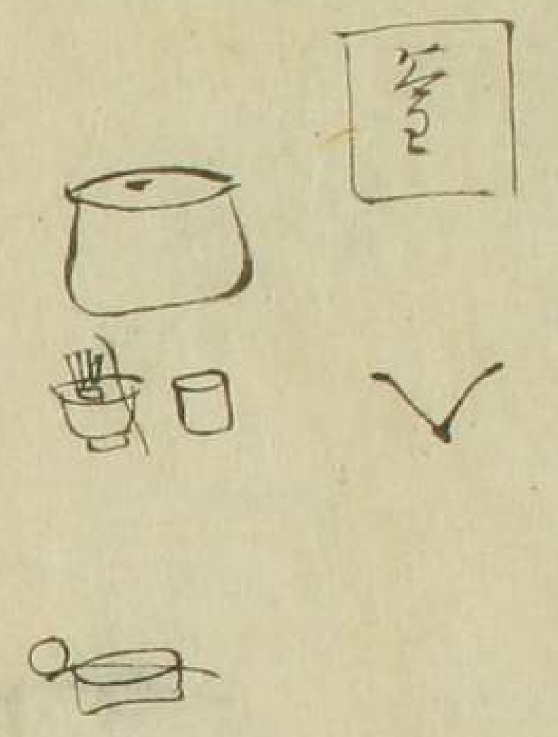


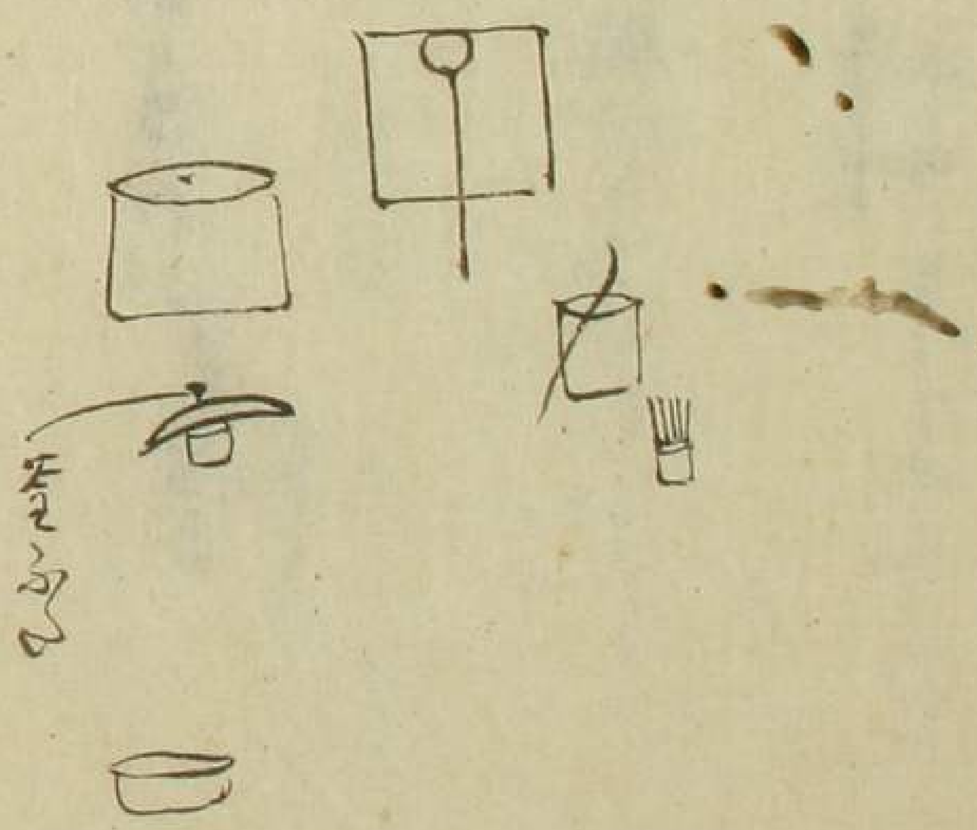
此かさり 茶碗子 かさるへし

不勝棚
上 茶入
下 茶碗
柄杓ハ下ニかけへし
上 羽箒
下 香合
中香合羽箒下ニかけへし

安永二年十一月八日 … 七

小板敷風炉穿附



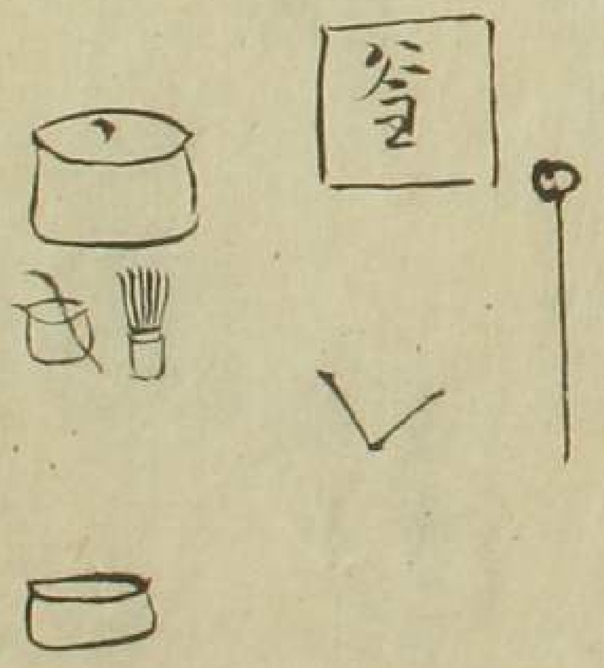


此手まへ風炉にて柄杓引カス茶碗なと付く事も上段

合せ月ヨ三角にたて飾るへし 柄杓入用なら … 建水置へし

出しの柄杓入用次第にて立て建水に置へし

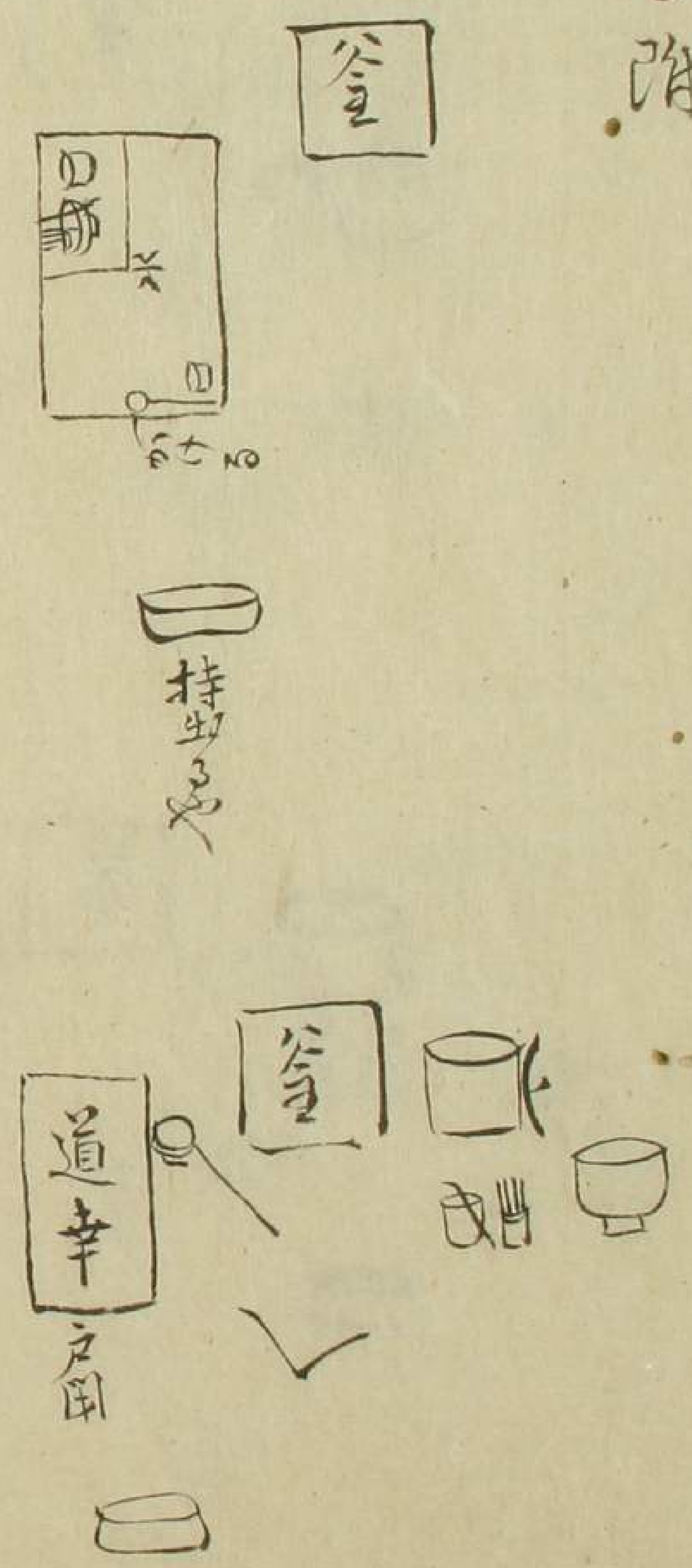
又



風炉
穿附柄杓引ときハ茶碗茶入をも置合 … かさるへし

道幸手前

客詰



道幸ノ内飾棚の前之概之の准して概之茶碗又は棗一ツ

濃茶之茶之水指、概之茶入柄杓蓋置と持出てもよろし

道幸置様は戸引あけ台子まへ入置の縁切戸出て棚之置し

立て引し棚て水指之棗茶碗三柄杓蓋置持出てかざり

のは備置して立る也し其れ備置の仕様にて[illegible]

濃茶之節は初入概之水指之て

下之茶碗　後入之節概居置下水指茶入出ては柄杓蓋

道ノ事

あらん始る初入後入ても上客の置道幸之戸棚をあけし中之く

あらしして立ても茶碗[illegible]して立之

炉ハ向ふ切なくて居なし

一 公義御茶師

上林又兵衛　松尾信乃　星野　竹田

八島　井の毛　退田

西原喜兵衛　松田　外二名　宗十二名

濃茶之銘

大祝　祝昔白　後昔白　初昔　好昔

井昔白　宇の字　一ノ森　日ノ白

一 うす茶

極揃　初後

其外の銘あり

一 羽帚先と炉ハ炉縁二寸ニ置きたるかく掃拭ふりや

一 小羽帚ニハ四ツ置て一ト當ニ可置し

一 蓋置縁ゟ三寸半周

但し釜据ハ大かた縁ゟハ蓋置七所

向ふによせてもよし　又掃拭可置所

元ノおくニ置へし

一 前灰のときハかたく炉端ちかくうけへし

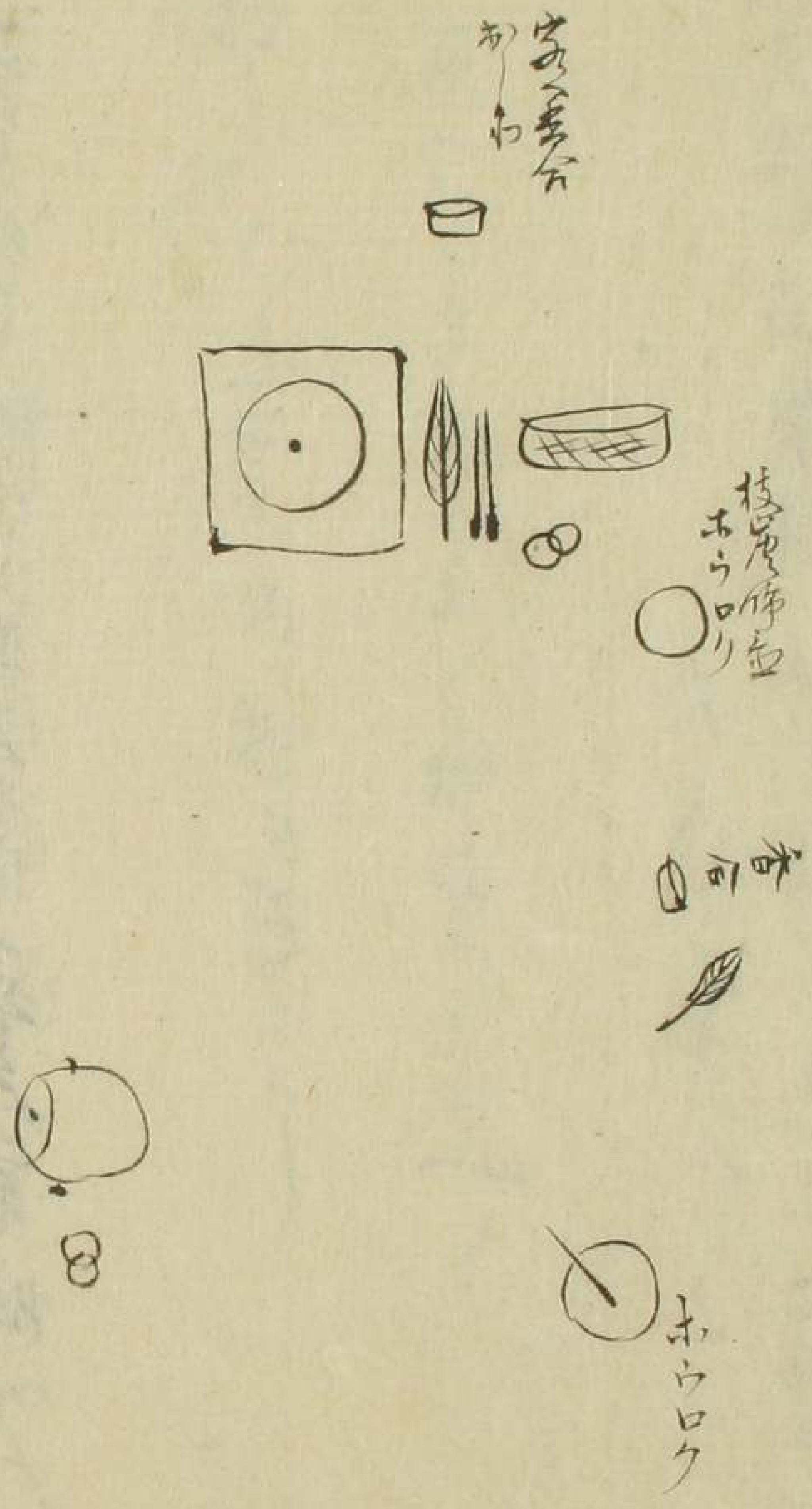
一 掃拭ハころふ置て内へ捨て置し

一 長板茶子掃帚各まさに炉縁ゟ八寸ニ置や

又盆ハ掃き子帚ハまさ人置寸ゟまさ人寸ニ帰すへし

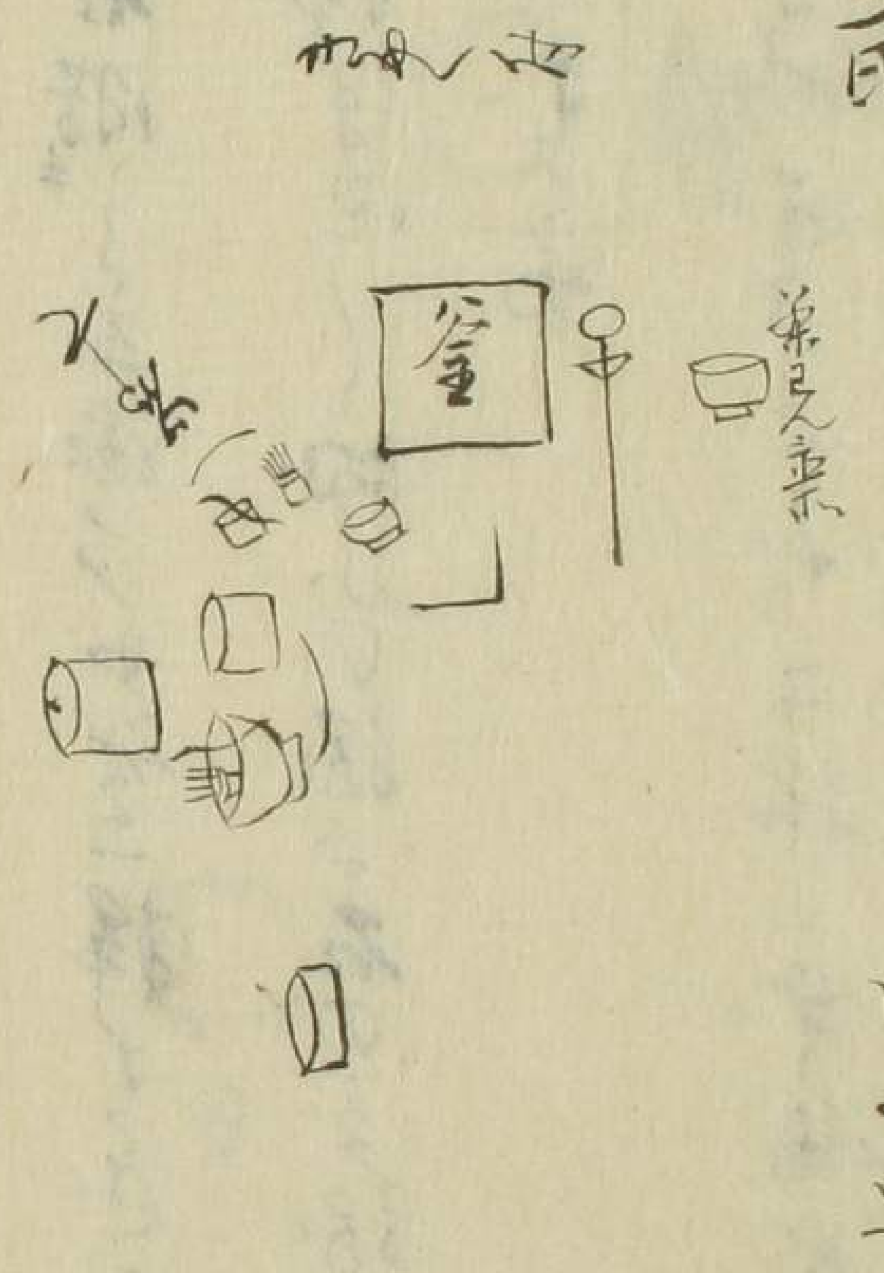
イロリ手前

つる中出ん平ノ子茶



炉縁ヲ掃除右膝手ニテ羽ノ出ル所ニ掃キ込ミ右ノ羽縁ニ
利キ込ノ縁ヘ掃キ込ミ向フノ縁ヨリ右ノ縁ヘ掃キ込ミ掃ク
膝ヲ付ケ一ツ掃キニモ掃クヤ
炉縁ノ羽ニテ灰先ヘ掃キ込ミ二掃キハ先ヅ右ヤ下ヘ掛ケ当テ
取リテ灰ヲ掃キ灰入レ直シ枝炭掛リ置キ直シテ炉
縁ノ炉縁先ニノ置クニ掃キ置ク右ノ羽ヲ取リ直シ向フ右
左ト掃キ置キ灰ヲ手ニ掃キ置キ置クナリ

点茶平手前



もこひ点のうす茶

水指置中ノ先中取しまへて方ニ帰り前ニ 茶入ト嗅かさる

なる利 建水ニ蓋置 柄杓ヲ仕廻持出 左ノ脇ニ置 蓋置たく

その縁分三ツ半目ニ置 柄杓居まへて通りニ引へし 茶器ニ

崩して後炉ノ角ヲ水指ノ向千トリニ置や茶巾釜蓋

のう 一茶点へし 取して後水指ノ蓋を置し

濃茶ニても同じ

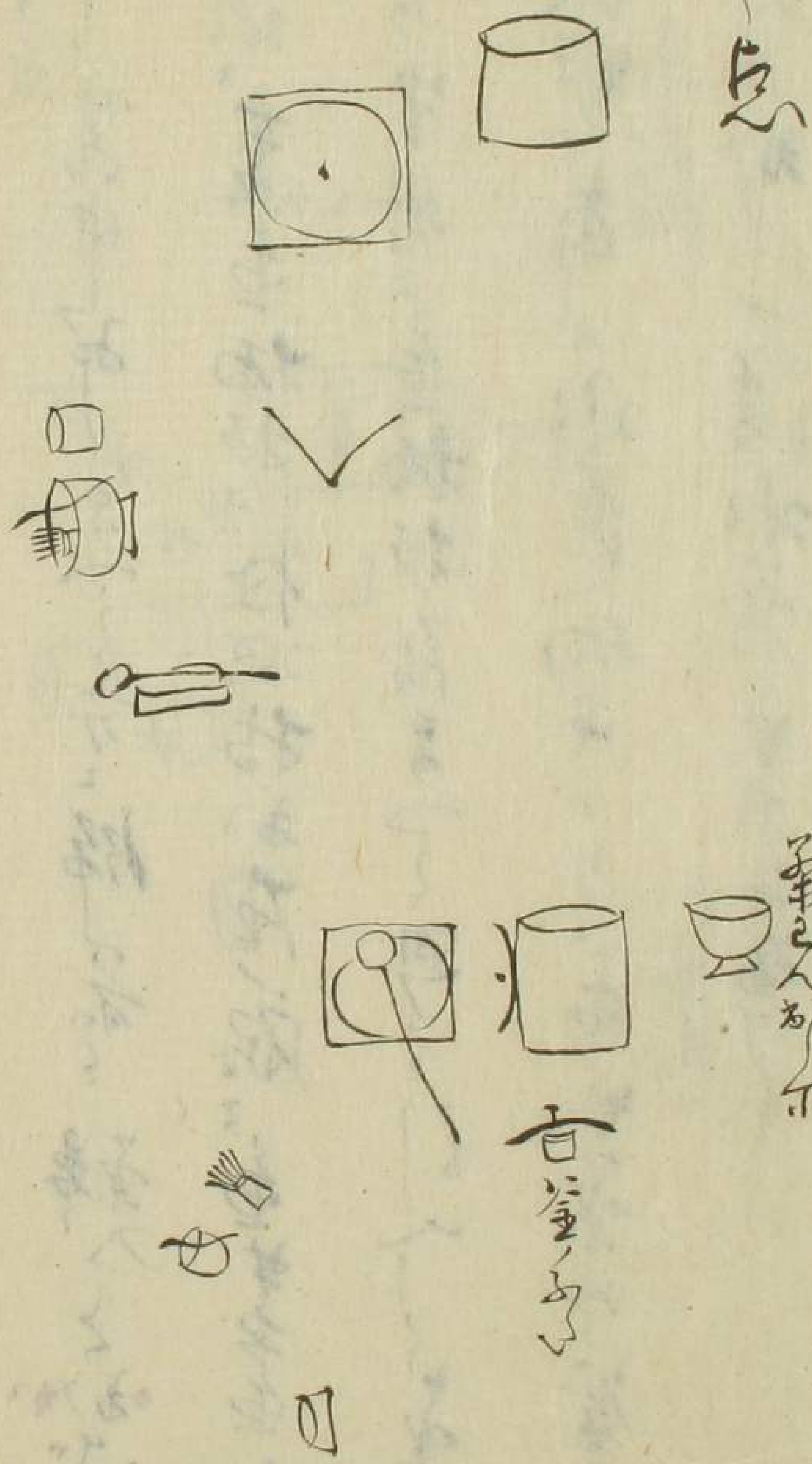
水指のまへ茶入かざり置 茶碗茶筅を仕廻持出茶入ヲ

錯鶴ニ柄杓蓋置仕廻持出て点しや

茶巾水指の蓋の上ニ置茶せん通しの湯を汲て中蓋置す

通し茶巾後ハ釜の蓋の上ニ置之

同なかし点

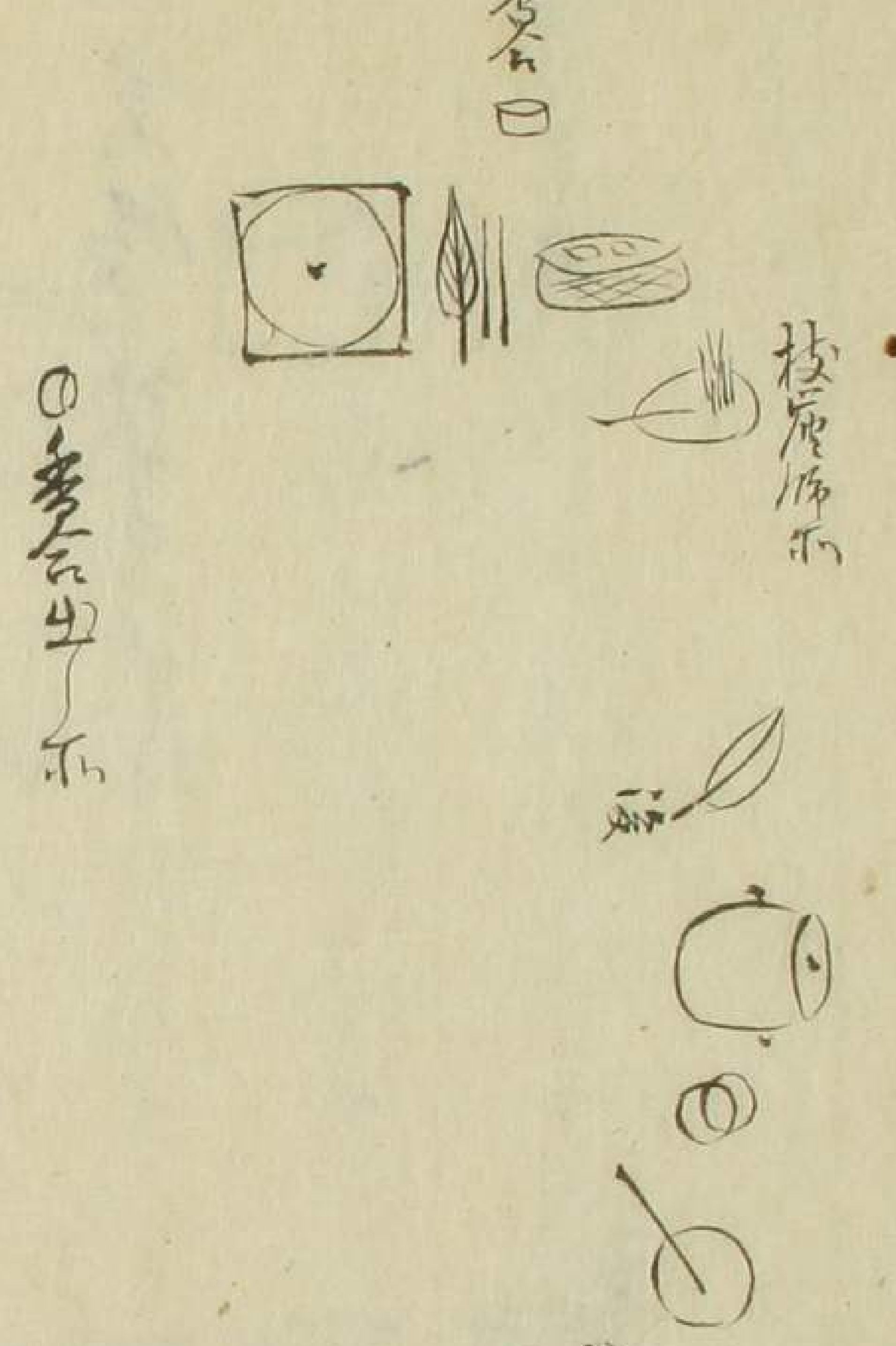


水指を始ちくの生中ニ置茶入茶碗ノ茶巾の生巾如し

まへよりニかさる也茶去ニかさそれハ如し家月ニてもよし

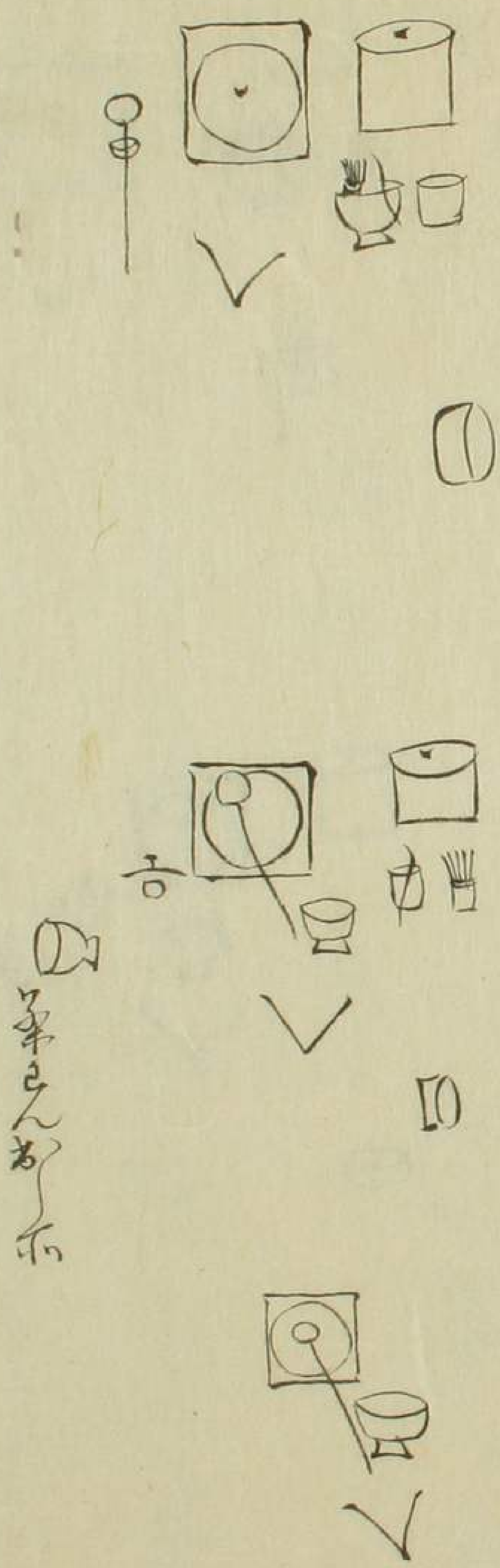
点茶生ん徳ニ如なし

向ふ切左手勝手炭



炉縁掃除本勝手之如前

月点茶手前



薄茶まて右点や茶巾釜蓋の上ニ柄杓置四ツ割下ニ而とり

同し

濃茶之前し

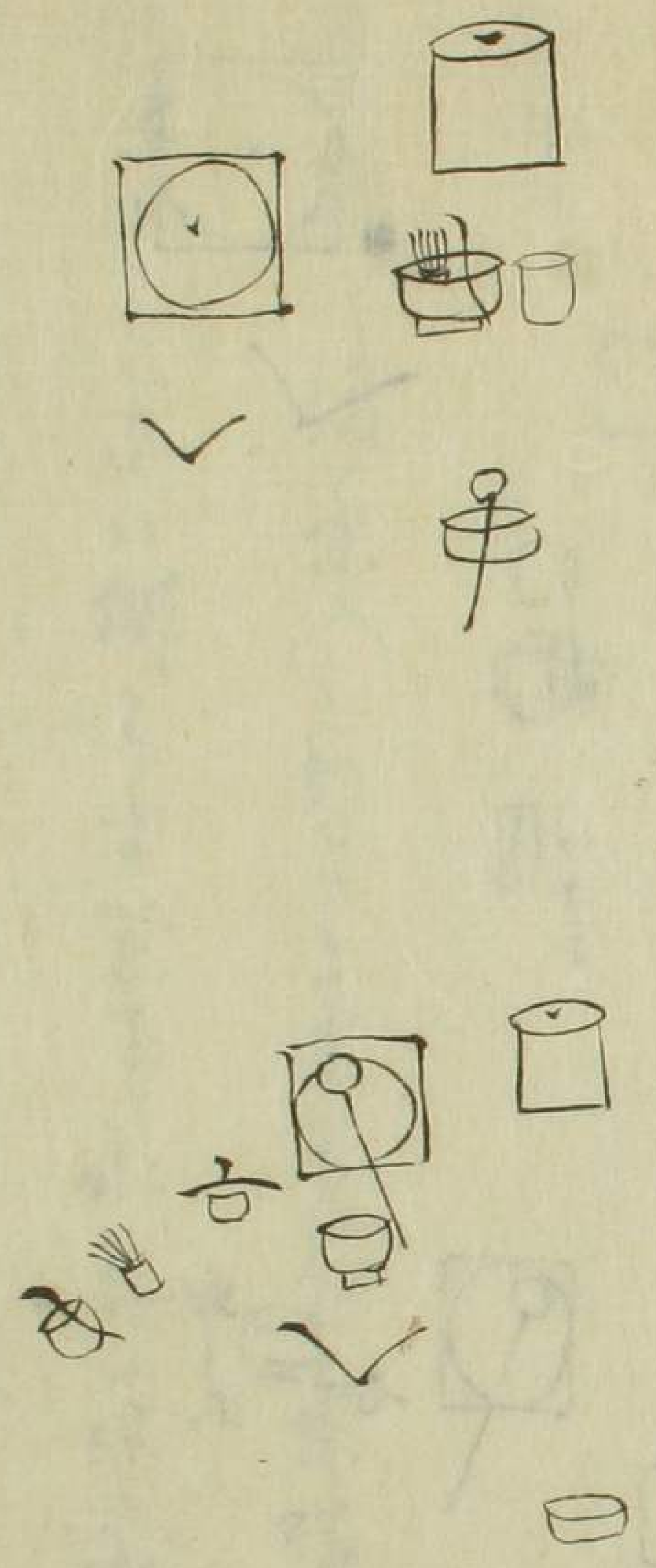
茶入水指の前ニ茶わん茶杓仕込持出水指まへニ飾合せ建

水こぼし蓋置ハ後ニ仕廻之時持出点ス也

茶巾水指ノ上渡ニ置茶碗の上湯汲て中蓋へ也

同

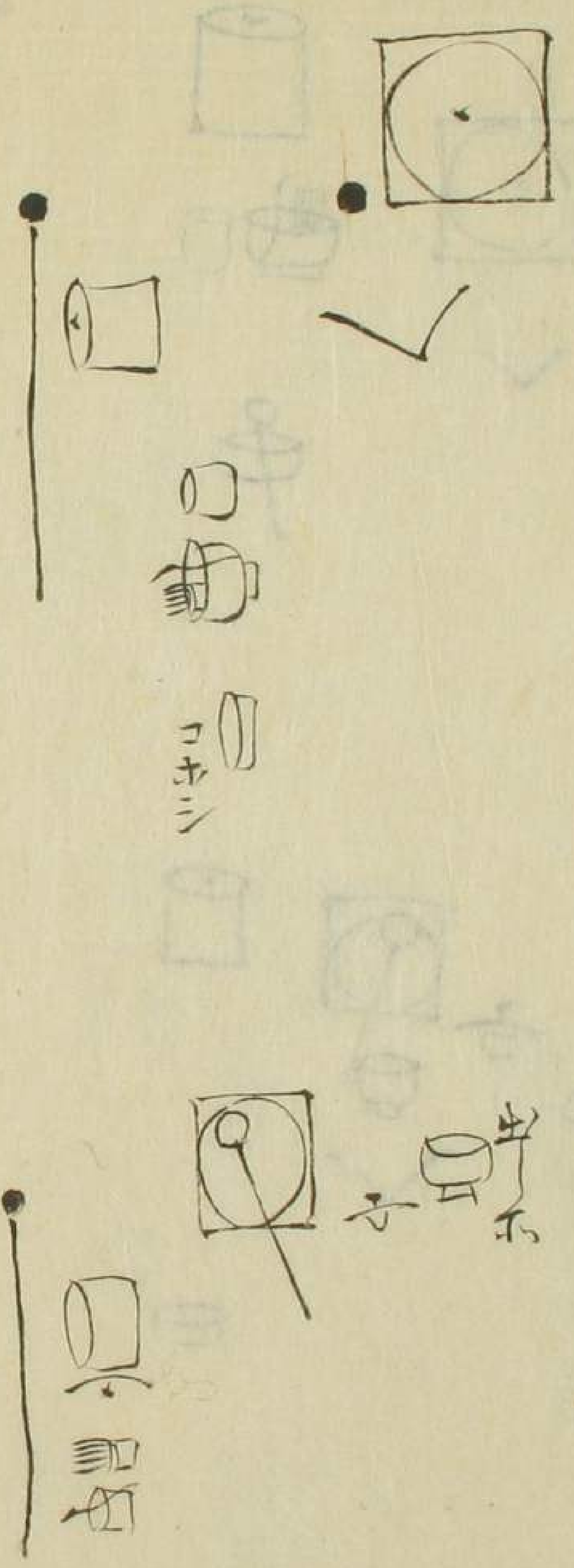
流点



此圖ニして点ル事ハ薄茶濃茶共ニ同し事也

莚棚

大目点ともあるへし



水指莚棚のまん中に置茶入茶碗水

指の前に置勝手付にて置まへの方へ寄せて置へし建水

左の通り

茶具出し後茶入はあとに茶筅茶巾茶碗のあとに茶入置

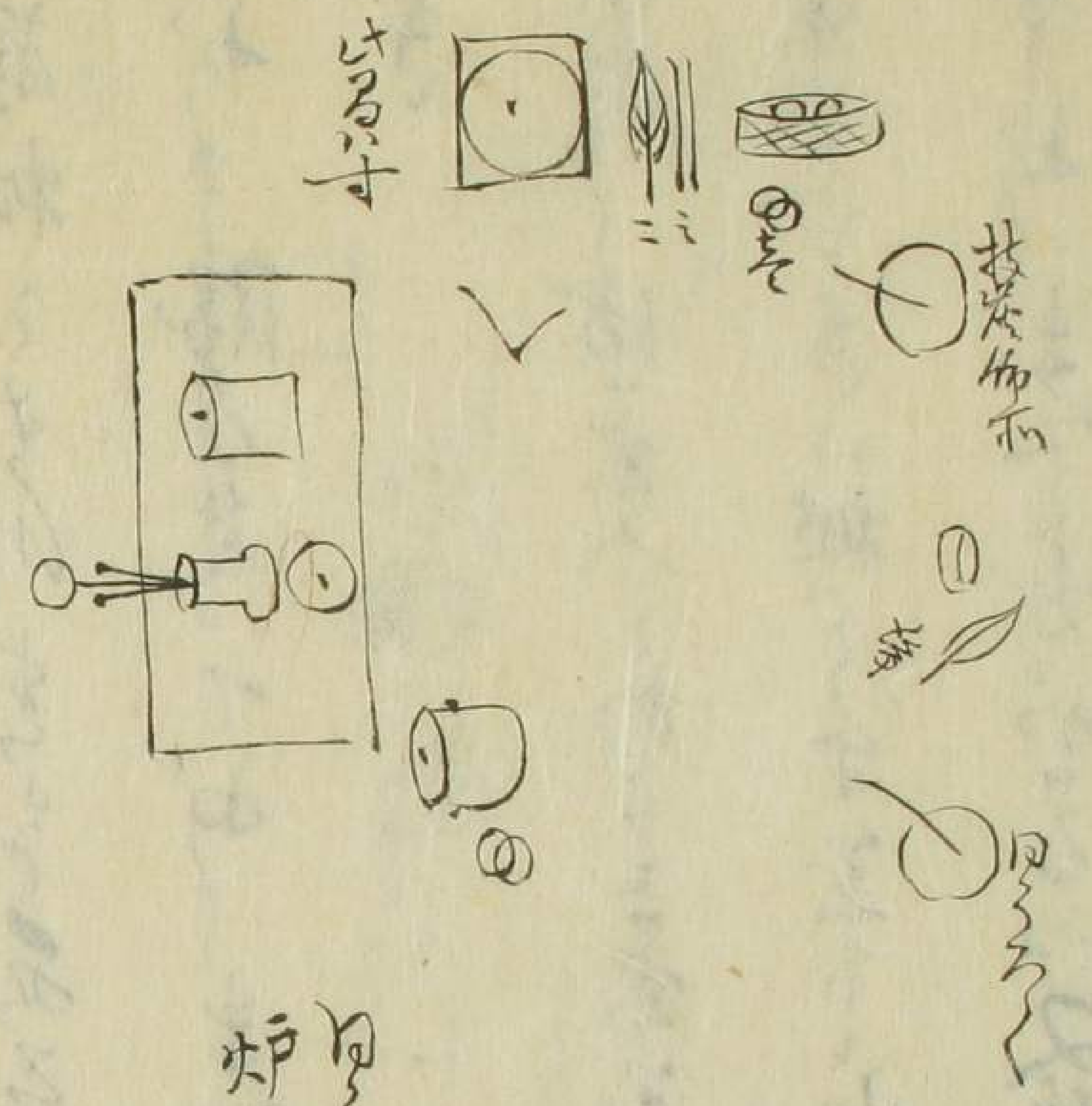
や濃茶のときハ棚にうす茶ハ下に水指茶入水指の際の

る其中置ましき方にかさるや又薄茶入かさる事も有之

點前かけ薄茶巾水指の蓋のうへに合中蓋すへし

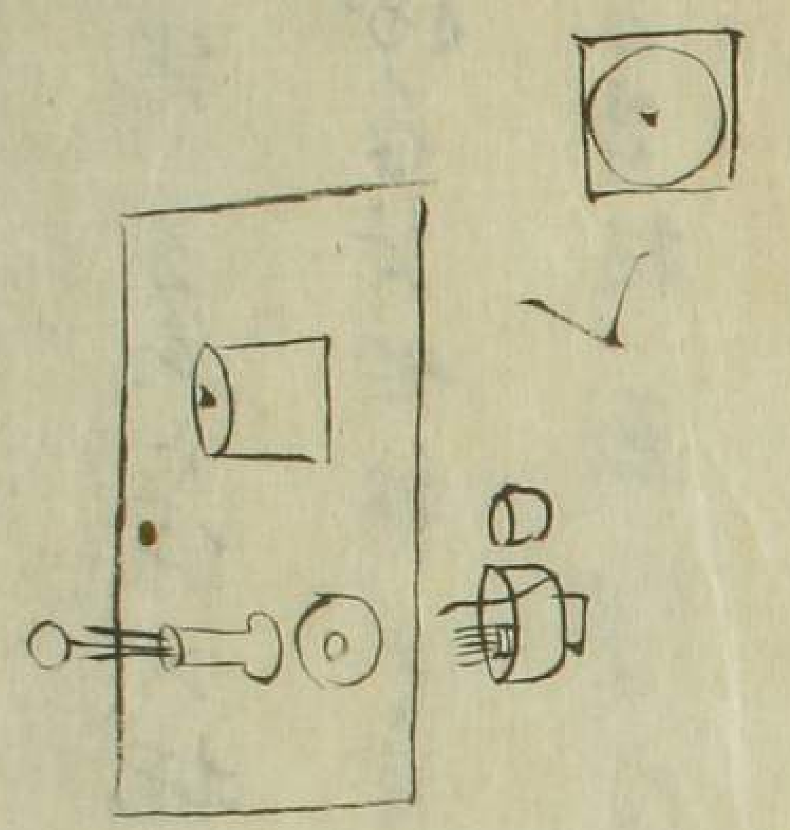
長板
臺子

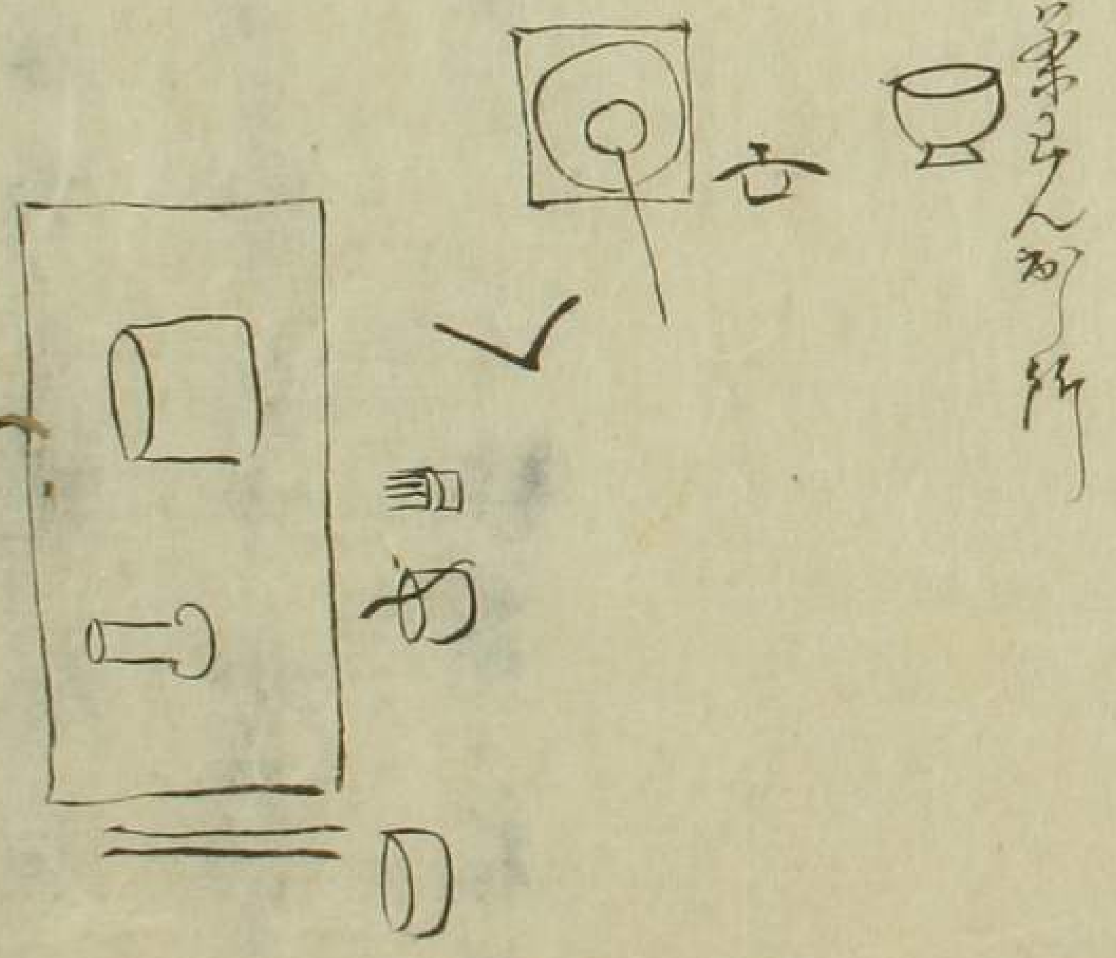
炭手前



風炉くまき灰のときハ
炉掃ちみえけて右なり

長板





柄杓置四ツ一ト茶こ引や

濃茶ニ而茶入柄杓立ニ茶たくニ置て飾置し

又勝手付地板ノもそれニかさるも茶ノ茶巾水差のまへ置

勝手付板ノ角湯ヲ汲て中蓋へく　仕舞　柄杓の

ほとし